血染めの異能者

オビワン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
血染めの異能者

【Ｎコード】
Ｎ２８２７Ｋ

【作者名】
オビワン

【あらすじ】
超能力者による犯罪や事件が増加する中、海軍少尉である片桐左近は対能力者部隊「秋水」に配属される。能力者でもある左近は、一癖も二癖もある仲間と協力し、帝都を脅かす超能力者事件を解決していく。

※現在執筆中止中　改稿版を投稿予定です。

いざ帝都

＞i6220―509＜

初桜乱れ咲くは四月。穏やかな風と柔らかな日差しが帝都に春の訪れを告げる。

俺はある人物に会うために人々が行きかう雑踏にまぎれていた。

大きく息を吸い込むと自動車の排気ガスと隣のサラリーマンのコロンの臭いが混じった空気が肺を満たす。やはり帝都の空気は汚れている。故郷の草木の香りが懐かしく思えた。

海軍兵学校を卒業し配属が決まり帝都へ足を運んだのだが、ここは横須賀の港町とは違った活気があった。さすが日本の首都というだけある。

天へと高くそびえ立つビルヂングと道を走る路面電車や自動車が日本の驚くべき速度での発展を象徴しているように感じられた。

ふと時計を見てみる。時計の短針はちょうど二時を過ぎるところを指していた。少し早く来すぎたようである。俺は腹ごしらえと時間つぶしを兼ねて近くの蕎麦屋を訪れた。

客足のピークが過ぎたのか店内には数えるほどの人しかいなかった。

俺は黙って空いているカウンター席の一つに腰掛けた。そして品書きを見ずにざるの大盛りを注文した。蕎麦はざるに限るのである。

数分後にはざるに大きく盛られた蕎麦が運ばれてきた。小皿にはわさびとねぎが添えられていた。

口に入れたらあまり噛まずに飲みこみ、喉越しと鼻に通る香りを楽しむ。これが江戸っ子の粋な食べ方だそうだ。

俺は蕎麦の先だけをつゆに浸し一気にすする。それと同時に口の中に蕎麦の香りが広がる。やはり蕎麦は美味い。俺はあっという間にざるに盛られた蕎麦を平らげた。

店を出ると時計は三時過ぎを指し示していた。約束の時間になっ

たので俺は待ち合わせの場所のとある喫茶店へと向かう。
　コーヒーの匂いが漂う店内では女学生たちがたわい無い雑談に花を咲かせていた。
　そんな中、奥の席で一人コーヒーをすすっている男がいた。俺は男の席に歩んでいき、対面に腰掛ける。
「そんな苦い豆の汁のどこが良いんですかね？」
「見かけは大人のようだが味覚はまだまだ子どものようだな」
　そう言って笑いながら男はカップを傾ける。
　男の名前は村上、貿易商を営んでおり政界ともコネクションを持つ男である。このようなただのしがない喫茶店にいるはずの無い人間である。
「それにしても何でこんな喫茶店なんですか？　村上さんならもっと良い店ぐらい知っているでしょうに」
「この店のマスターの淹れるコーヒーは素晴らしい。いつもお忍びでこの店を訪れてはこのブレンドコーヒーを頼むのさ。お前も一杯どうだ？　コーヒーぐらいなら奢ってやるぞ」
「結構です。コーヒーなんかより蕎麦湯でも飲んでたほうがよっぽど良い。それに奢るなら酒を奢ってください」
「酒なら今度浅草のバーで電気ブランでも飲ませてやろうじゃないか。あの酒はどの酒よりも早く酔うぞ」
「その言葉忘れないでくださいよ。絶対に奢ってもらいますから。あなたの財布が空になるまで飲んでやりますよ」
「はは、好きなだけ飲ませてやるよ。それよりもだ、今日はそんな話でお前を呼んだんじゃない」
　急に村上さんが真面目な顔をして言う。
「お前の配属が決まった」
「それは結構な事ですが、どうして政治屋の村上さんがただの軍人でしかない私に直々の辞令を出すんですか？」
　村上さんは政治家ではあるが軍人ではない。俺のような一少尉の人事に口出しをできることは無いはずだ。

「私はお前が思ってる以上に顔が利くんだよ。というよりもこの人事自体私の差し金だ。まあ私の貿易の方での知り合いや政治の仕事の方のコネでちょっと無理を言ってもらったという形になるな。今度酒でも奢らないと文句を言われそうだ。まあもちろんお前にも配属祝いで飲みに連れて行かせてやろう」
「手短にお願いします。帰りの汽車が無くなってしまいます」
村上さんはいつも回りくどい話し方をする。すぐに本題に入ってくれないことが多々あるために何度もうんざりする思いをさせられた。
「話が逸れたな、分かった手短に言おう。帝國海軍少尉、片桐左近、貴官に対超能力者部隊『秋水』への配属を命じる。これは軍部からの正式な辞令であり、貴官には拒否権がある」
「帝國海軍少尉、片桐左近、確かに辞令拝領致しました」
「よろしい」
村上さんが満足そうに頷く。
それにしても軍の正式な辞令を喫茶店で伝えられるとは思わなかった。このような場所で辞令を受けた軍人は帝国軍人のなかでは俺だけではないだろうか。思わず苦笑いをしてしまった。

◆

四月某日、俺は上野公園に来ていた。
春の暖かな陽気と息を呑むほどの見事な満開の桜の花に誘われてきたのか、多くの人々がこの上野公園を訪れていた。
ふと脇を見ると咲き誇る桜を見ながら酒宴が開かれていた。
もし職務が無ければ一目散に酒の席に割り入ったところなのだが、いかんせん人を待っているので酒を飲むわけにもいかない。
「そこのお兄さん、こんな花見日和の日なんだからそんな所に突っ立ってないですこし飲んでいかないかい？」
「いや、結構だ。人を待っているんでな」

くそ、飲みたい。でも我慢だ俺。
「そんなこと言わずに一杯どうだい？　こんないい天気なんだ少しぐらい飲んだってバチは当たらないさ。むしろこんないい日に飲まずにいつ飲むんだ」
「飲みたいのは山々だが……」
「飲みたいんだろ？　そうだろ？　飲んじまいなよ。その人だってこんな日なら飲んでもいいやって許してくれるに決まってら。ほらほら一杯目はサービスだ」
そう言って男が俺にお猪口を持たせて、徳利に入った酒をその猪口にトクトクと注いでいく。
こうまでされると逆に無下に断る方が失礼な気がしてきた。
俺は注がれた酒を一気に煽る。
ああ、やっちまった。でもうまい。
「やっぱりな、人生ってのは飲みたいときに飲みたい酒を飲むってのが醍醐味なんだよ。自分の欲望に正直に生きるのが最高だ」
「そうだな、人間正直が一番だ」
そう言ってもう猪口に酒を注ごうとしたときだった。
「あの……もしかして片桐少尉ですか？」
不意に俺の名を呼ぶ声がする。
まだ大丈夫だ俺は一杯しか飲んでない。一杯なら分からない。
「いや、これはあれですよ。水です水。元気のでる不思議な水です。般若湯というお坊さんが飲むありがたいお水です。決してお酒なんかではありませんよ」
そう言って振り向くと一人のセーラー服の女学生がいた。
大きな黒い瞳、整った鼻立ち、桜のような色の艶やかな唇、十人が見れば九人は美人だと言うであろう容貌だ。ショートカットの黒髪には桜の花びらが付いていた。
少女はこちらをいぶかしげに見つめる。
「般若湯って日本酒の事ですよね？」
少女が皮肉交じりに言う。

「そうとも言います」
「……片桐少尉ですか？」
少女はため息混じりに問う。そのため息には俺に対しての呆れの意が込められていたことは容易に想像ができた。まったく俺というやつは……。
「そうだけれども君は？」
「私は『秋水』の小早川ハルといいます。少尉をお迎えに上がりました」
「小早川さん、キミが？」
俺としてはてっきりヒゲを生やしたいかつい、いかにも軍人だ、というオッサンが迎えに来るとでも思っていたので意表をつかれた。
「そうですが、何かご不満でも？」
「いや、何でもないよ。とりあえず案内をお願いしようか」
そう言って俺たち二人は秋水へ向かった。
ちなみにその道中に小早川ハルには計六回ほど「酒臭い」との批判を受けた。

戦のニオイ

「たまげたなあ」
そう呟かずにはいられない荘厳な洋館であった。その見る者を圧倒する外観を前にしては田舎から出てきた身である俺は巨象を前にした蟻にも等しかった。あの横須賀のむさ苦しい軍港とは天と地の差だ。これが文明開化というのか。
「入り口はこっちです」
ハルの後を付いて歩きながら館へと入る。
館内も立派なもので、あの外観に負けず劣らず堂々とした造りとなっていた。
その上で繊細で品のある落ち着いた雰囲気もかもし出していた。ドアノブ一つを例に挙げても俺とは全くかけ離れた何かに思えて仕方がない。
「この先が少将がいらっしゃる部屋です。私はこれから用事があるので一人で行ってください」
「あ？　ちょっと待て、部屋ってどの部屋だよ。多すぎるぞ」
「つきあたりを右です。分からなかったら人に聞いてください。では」
ハルはそう言って去っていった。
これは第一印象から最悪だ。微塵の好意も感じられない。
仕方ないのでハルの言ったとおりつきあたりを右に行くと一つの部屋が見えた。恐らくこの部屋だろう。
俺が部屋に入ろうとドアノブに手をかけたところで部屋のドアが開く。凄いなこの扉は自動で開くのか。
「ん？　貴方は？」
一人の男がちょうど部屋から出てきた。
「ああ柴田君、彼だよ、さっき話していた新しく配属されるっていうのは」

「そうでしたか、ではこちらへどうぞ。少将がお待ちです」
男はそう言って俺を部屋に招き入れ、入れ替わりに部屋を後にした。
「おう、よく来たな片桐少尉、俺が張本少将だ。どうだ一杯やるか？」
部屋では椅子に腰を掛けたもう一人の男がグラスを片手に顔を赤らめていた。
部屋に漂う匂いから察するにどこか外国のブランデーだろう。しかも高級品だ。
「酒って……少将！　何考えているんですか。とりあえずいただきます！」
「おう、話が分かるじゃねえか。まあ飲みな」
少将はそう言ってどこからかもう一つグラスを持ち出してそれにブランデーを注ぐ。
「コニャックだ。そこらの新卒士官が飲めるような代物じゃねえぞこれは」
俺はグラスのコニャックを口に含む。その瞬間アルコールの刺激とまろやかな風味が舌を撫ぜた。素晴らしい、さすが少将というだけあっていい物を飲んでいる。
「少将、このボトルごと頂いてよろしいですか？」
「駄目、これは俺のとっておきだから。さっきのは配属祝い。それよりもだ、来て早々なんだが転属届けを事務に渡しておいてくれ」
「転属届けですか」
俺としてはもう少しこのコニャックを味わいたいところなのだが。
「なあに、ちょっとした書類の確認をしてもらいたいだけだ。すぐに終わる」

◆

少将に命じられるままに俺は事務へと向かい転属の手続きをした。

少将はちょっとした書類の確認と言ったが全くちょっとではなかった。少将という立場にもなればあれくらいの書類はちょっとの部類に入ってしまうのだろうか。胸の勲章は増えても良いが、書類仕事は増えて欲しくないものだ。

「確かに受け取りました」

書類を受け取った事務員は文字通り事務的で無駄の無い所作で書類をまとめていく。まるで寸分違わず文字を打ち込むタイプライターのようであった。

俺はふと時計を見た。時刻は午後一時をわずかに過ぎたばかりであった。俺の腹の時報も昼を告げていたので食堂に向かった。

食堂は飯どきだというのに数えるほどの人しかいなかった。

この館は広さの割には人間が少ないのである。というのも秋水の存在自体が公の場に出てはいないので何百人と人員を割くことも、多額の予算を堂々と回すこともできず、この洋館に拠点を置いてひっそりと秘密裏に活動しているらしい。

これだけ大きな館なのにひっそりというのはいささか不似合いな気もするが、この界隈は元々外国人居住地だったので似たような建物はそこらじゅうにあるためあまり目立たないのである。

「少尉、そんな所に突っ立ってないでこっちに座れ！」

少将が食堂に響く声で俺を呼ぶ。無視するわけにもいかないので少将の真向かいに腰掛ける。

「どうだ？」

「どうだと言われましても何も言う事はありません。何せまだ何の仕事もやっていないわけですから。それにここで私がどのような職務に就くのかも漠然とした理解しかありませんので」

「ああ？　お前村上から何も話聞いてないのか？」

「ここへの配属が伝えられただけです。まあ対超能力者部隊という時点である程度の予想はついていますがね」

「じゃあその予想で間違いねえよ。俺たちは警察なんかが手におえない類の超能力犯罪者を摘発するのが仕事だ。まあ最近じゃオカル

トじみた事件までまわってきてるみたいだけどな」
「超能力もオカルトみたいなものですよ」
「はは、それは違いねえな。ところでお前さんは当然前線でドンパチやってもらうわけだから覚悟だけはしておけよ」
「戦場で軍刀を持って駆け回るよりは安全でしょう。ところで小早川ハルについてなんですが、なぜ彼女のような女学生がこのような場にいるのですか？」
俺は隅で黙々と食事をとるハルに視線を移す。その小さな背中は騒乱とは全く無縁な存在に思えた。
「簡単なことだ。彼女も超能力者だからだ」
「彼女がですか？」
「お前も知っている通り秋水は表に出てくるようなものじゃない。裏でひっそりと活動をする組織だ。だからおおっぴらに軍や政府の人間を簡単に組織の一員にはできない。だが、今は一人でも多くの能力者が欲しい。だからこうして外部から素養のある人材を集めている。彼女のほかにも学生の能力者がここにはいるぞ」
「なるほど」
だが、そのような学生風情に能力者を抑える力が果たしてあるだろうか。
「……少尉、どうやら彼らの実力を疑っているようだな。飯が終わったら来い。彼らと一度手合わせをさせてやろう」
少将は俺の考えを見透かしたかのようにニヤリと笑う。
「望むところですよ」
そんじょそこらの学生に負けるほど俺はヤワではない。歳の差は数えるほどだが、実力の差ははるかに違うのだ。
「言っておくが、子どもと思ってなめてかからないほうがいいぞ」
少将はそう言い残すと食器を片して席を立った。
「……なめてませんよ」
歳は関係ない。戦場は殺すか殺されるかの場所なのだから。

相対する狩人ども

食事を終えた俺は少将の部屋を訪れていた。
「来たか。それじゃあ早速中庭に向かうとするか」
「最初から中庭に呼べば良かったのではないですか？」
部屋に行ってから中庭に行くのでは二度手間である。
「いや、こいつをお前に渡さないといけない」
そう言って少将は一本の木刀を俺に手渡す。こげ茶の色をした木刀はずしりとした重みがあり、その鉄のような刀身はまさしく鉄刀木と呼ぶに相応しい一品であった。
「手合わせとはいえ味方だ。能力を使った試合はさすがにいかんだろ。お前は絶対に能力を使ってはならない」
「手加減ということですか」
刀を持つとどす黒く、何か形容しがたい気持ちが腹の中でぐるぐると渦巻いた。それが緊張なのか、戦いを前にした武士の闘気のようなものなのか、それとも人斬りの狂気なのかは自分にも理解することができなかった。

◆

中庭にはハルを含め三人の姿があった。一人はハルよりも小さく、まだ幼さが残る少女。もう一人はハルより若干大人びた少年。
「本日よりこの秋水に配属された帝國海軍少尉、片桐左近だ。以後よろしく」
「八神進といいます。よろしくお願いしますよ少尉」
八神と名乗った少年がぎこちなく握手を求めてくる。
だが、先ほどから冷めた顔でこちらを睨んでくるハルとは違い、好意的な笑顔であった。
「少尉って呼ばれるのはどうもしっくりこない。俺はまだ二十一歳

なんだ。そう硬くならなくていいさ。見たところ敬語は苦手のようだしな」
礼儀作法に関してはてんで駄目な俺だから分かる。この少年は普段は敬語とは無縁のはずである。
「……左近さんって張本のおっさん並みに軍人らしくないですね」
「まあ、昼間から酒を喰らっている時点でいい勝負だよ」
「あー、それはどうでもいいことだ。うん、そうだ」
少将はどうやらこの話題については触れられたくないらしい。まあ俺も飲んだのだが。
「よろしく」
俺はもう一人の少女に声を掛ける。
少女は澄み切った大きな瞳で興味深そうにこちらを眺める。そして一言こう言った。
「……おにーさんお酒くさい」
「ｗｈａｔ？」
どうやらこの少女は鼻が利くようだ。
「ちゃんと挨拶をしろ」
「三橋すみれ、よろしくねおにーさん」
八神にたしなめられて少女は小さく頭を下げた。
「さて、挨拶が済んだところでちょっと提案したい事がある。いいかな？」
「何すか？　張本のおっさん」
「お互いの実力を知るために今から少尉と戦え。能力を使ってもいい。とりあえず戦え。少尉はその木刀で戦う」
「おっさんそれは無理な話だ。俺の能力はパイロキネシスだ。もし能力を使ったらこの屋敷が燃えちまうし、炎は木刀じゃ防ぎようが無いぜ」
「そうか、そうなるとすみれも無理だな。木刀では防げない。……ハル、やるか？」
「少将が言うならやりますけど……」

ハルが了承し、渋々木刀を手にとる。
お前の頼みならお断りだ、この飲んだくれ、酒臭くてやってられるか、といったところだろうか。
一体どうしてここまで露骨に嫌悪されるのかはよくわからなかった。知らないうちに彼女の気に食わない事でもしてしまったのだろうか。
「能力は使いません。純粋な剣の勝負です」
「では決まりだ。私の合図で開始する。……始め！」
少将の合図と共に場に空気が一変する。
真剣のように研ぎ澄まされた鋭利な空気が俺の身をじりじりとけずる。
少将には手加減をしろと言われていたが、どうやらその必要は無いようだ。
俺は左足を踏み出し刀を中段から大きく諸手左上段に、そしてそのまま右拳を右肩まで下ろす。八相の構えである。
一方のハルは木刀を中段に構える。正眼の構えだ。
その剣先は俺の喉もとを向いており、隙あらば一瞬で喉を突くことができるだろう。
ハルの視線は獲物を狙う虎のように鋭い。
だが狩りとは違う。俺は腹を空かせた虎に睨まれた不運なうさぎではない。同じように腹を空かせて彷徨う虎なのだ。
そのまま俺たちは無言で睨み合う。
それからどれくらい経っただろうか、互いににらみ合っていたのだが、ハルがしびれを切らしたのか、それとも勝負を仕掛けたのか、一歩踏み入り、遠間から一刀一足の間に入る。
その瞬間、ハルの体が躍動する。
ハルの剣は迷わず俺の喉に一直線に向かう。
そして、俺の首のわずか一寸足らず横を掠める。
俺の方が速かったかは定かではない。だが、ハルの突きを首一つでかわし、俺はハルの首もとに木刀を突きつける。回避と攻撃はほ

ぼ同時であった。
中庭に水を打ったような静寂が広がる。
「それまでっ！」
その静けさを破る少将の声が中庭に響く。
「……」
ハルは無言のまま構えを解く。そして小さく一礼。
やれやれ一戦交えても心は通じ合えずか、映画ならばここでお互いを褒め称える感動の場面なのだが。
俺も剣を収め、ハルに礼をし、
「いい突きだった。機会があったらまた手合わせを頼む」
そう言って俺は中庭を後にした。
木刀が当たったわけではないが何故か首もとを気にせずにはいられなかった。

◇

部屋に戻った私はそのままベットに倒れこんだ。
ベットのスプリングが軋む音が音が聴こえた。
私の頭の中ではスプリングの音と木刀が空を切る音、そして最後のあの言葉が鳴り響いていた。
「いい突きだった」
自分で言うのも何だが、あの一撃はなかなかの威力と鋭さを兼ね備えた、自信のある突きであった。
打突の瞬間、体は羽のように軽くなり、剣は私の腕と化し、その腕は伸びやかに繰り出された。
だが、あの男はそんな私の渾身の突きをハエでも払うかのように何の造作も無く避けた。
あの男には私の突きはハエであり、剣の風を切る音はうっとおしい虫の羽音でしかなかったのだ。
そして最後の袈裟切り、木刀が獣のように唸り声を上げながら私

の首筋に噛み付いた。
あの一撃で私は喰われたのだ。あまりにもあっけないものだ。
周りには相打ちに見えたかもしれない。しかし、私は敗北感に満たされていた。
私は先手を打った。だがそれは先に初太刀を打つことによって、戦いにおいて優位に立つ意味合いはまったく無かった。
怖かったのだ。あの男の構え、目つき、呼吸、それら全てが阿修羅のような絶望的な恐怖を私に与えた。
恐れを抱く者の行動は二通りある。むやみやたらに噛み付くか、そのまま案山子のように立ち尽くすかである。私は前者であった。
今日は二つ我慢のならないことがある。
一つはあの男だ。軍人だというのに昼間から酒を飲むなんて、全くだらしない。
靖国に眠られている父上が見たら何と言うだろうか。間違いなく日本の将来を憂われるだろう。
そしてもう一つはそんな男に負けた自分だ。
生前、父上はよく「剣にはそれを振るう者の全てがあらわれる」とおっしゃっていた。
その理屈で言えば私はあの男よりも劣っているという事になるのだ。それは流石に我慢ならない。
私はふと窓の外を眺める。
春の空は変わりやすい。さっきまで気持ちの良い陽射しが部屋に差し込んでいたというのに、今ではどんよりと陰鬱な曇り空に様変わりしていた。
まるで今の私の心を表しているようであった。
私は再びベットに顔を埋める。こんな時は寝るのが一番だ。
明けない夜は無いと言うように、晴れない空も無いのである。
今は曇り空だが、いつかは必ず透き通る青空が顔を出すだろう。
だからその時まで少しだけ眠るとしようではないか。

ダム

天気のよい春の昼下がりのことであった。
春の陽気に眠気を覚えながら俺は食堂で八神と一局交えていた。
この洋風の館ならばチェスなどに興じたほうが似合うだろうが、生憎俺も八神もチェスは打てないので、こうして白と黒の碁石をつまみあっているのだ。
ちなみに負けたほうは勝者に何か奢らなくてはならない。
安俸禄の俺としては絶対に負けるわけにはいかない。
「それにしても左近さんは仕事しないんですか？　昼間から碁なんか打っちゃって」
「大人は見えないところで仕事してるものなの。こう見えても午前中はずっと書類とにらめっこしてたんだからな」
秋水に配属されたからといっていきなり能力者と街中を大騒ぎにさせる捕り物劇を繰り広げるわけではない。
俺がする仕事といえば警察から送られてくる事件の調書をひとつひとつ確認し、能力者のものと思われる事件を探していくというものだ。
今こうやって碁を打っているというのは能力者の事件が見つからなかったということである。
「事件がないってのは良いことだよ。それだけ帝都が平和って証拠さ」
「そんなもんですかね……おっと、それは悪手ですよ」
八神の黒が俺の打った悪手を突いて白の陣に切り込む。
しまった。アテ間違えた。
「で、そういうお前は何で昼間にここにいるわけだ？　学校はどうした」
「秋水に所属する学生って名目上は特別協力生ってなっていて、有事の際には簡単に抜け出せるんですよ。そういうわけで俺には何の

お咎めも無いんですよ」
「ほほう、お前の言う有事ってのは俺と碁を打つことなんだな？」
「まあ、堅いことは言いっこなしってことで。ハルには内緒ですよ。アイツにバレたらなんて言われるか分かりませんから」
「言わない言わない。それにしてもアイツの真面目さには舌を巻くよ。この前も酒飲んでたら睨まれたんだぜ」
夜に少将からくすねた酒を食堂で飲んでいたとき、それを見たハルに侮蔑の眼差しで見られた。
流石に初日の待ち合わせ前みたいに酒を明るいうちに飲むなんてことは自重したのだが、人間第一印象が重要なもので、ハルには完全に「だらしない酒飲み」として軽蔑されていることであろう。
今考えるとハルの冷たい態度にも納得ができる。
「それは左近さんの日頃の行いですよね」
「身も蓋もないことを言うな。それにそんなこと言ったら少将はどうなるんだよ。あの人は酒と遊郭に行く事しか頭に無いぞ」
俺であの態度なら少将なんて無視どころか存在すら抹消されても不思議ではあるまい。
「左近さん、後ろ後ろ！」
八神が苦笑いしながら後ろを指差すので振り向くと少将がいなさった。
「あら」
「あら、じゃねえよ。仕事はどうした」
少将が丸めた新聞で俺の頭を小突く。
まあ、話し振りからして怒ってはいないだろう。
「一応、警察からのは一通りチェックしましたけど能力者絡みの案件は見つかりませんでしたよ」
「そいつはご苦労。で、追加でコレが来たんだが、どう思うよ？」
少将から二枚の書類を受け取る。
『都内建設会社にて男性一名が遺体で発見。遺体には無数の切創。頚動脈に三センチにほどの傷有り。死因は失血死。被害者は同社重

役の佐々木氏』
『都内の繁華街にて男性一名が遺体で発見。全身に無数の切創有り。被害者は内務省勤務の三笠氏、遺体の状況からして建設会社重役殺害事件の同一犯と見られる』
日付は一枚目の事件が一週間前、二枚目の事件が三日前となっている。
「遺体に無数の切創っていうのが気になりますね。見たところ得物は刃物のようですが、それならば一気に首を掻っ切ればいい。被害者が抵抗して付いた傷というには不自然すぎますしね」
「俺も全く同意見だ。これは能力者による犯行の可能性がある。と言っても犯人の能力の見当もつかないし、動機だって分からない」
「物取りの犯行じゃないんですか？　会社重役と官僚、狙うにはもってこいですよ」
「それが何にも盗られてねえんだよ。所持品の財布や腕時計、宝石は全く手付かずだ」
「じゃあ金目当てではないのに何で殺したんですかね。被害者二人の共通点なんて金持ちってだけですよ。他に理由が見つからない」
「まあ、警察の方も動機が分からないらしいしな。まあ、とりあえずこの件については保留だ。邪魔して悪かったな」
そう言って少将は去っていった。
「左近さんの番ですよ」
パチンという碁石の音が俺の意識を白劣勢の十九路盤に引き戻した。
まずいな。これは奢りは決定的なようだ。

◆

俺と八神、そしてすみれの三人はとある喫茶店を訪れていた。
あの後、俺に平安時代の碁聖がとりついて、代わりに打ってくれて白の劣勢が覆るという奇跡も起きなかったので、約束どおり八神

に奢る事になった。
　そこまではまだ予想の範囲内だったのだが、食堂を出たところですみれに遭遇してしまったのが運の尽きだった。
　この少女、俺が八神に奢る事を知るや否や「わたしもいくー」と眼を輝かせてついてきたのである。
　子どもと言うのは残酷な生き物で、俺が金欠と言うのを知りながらも品書きのなかで一番高価な甘味を容赦無く注文してくれた。満面の笑みで。
　その残酷さはさながら笑いながら昆虫の四肢をむしる無邪気な子どもであった。今回むしられるのは俺の財布なのであるが……。
　八神が気を利かせて一番安いコーヒーを頼んでくれたお陰で、むしられる手足は一、二本にとどまったのだが、それでも大打撃である。
「おいしーね」
「そうかい」
　その笑顔に悪意がないから余計に心苦しいのだ。
　世の親と言うのはこういう笑顔を日々の生活の癒しにしているのだろうか。
　俺はすみれの親では無いから癒しの効果は薄いようだが。
「おやおや、片桐少尉はいつの間にそんな可愛らしい娘さんをお作りになったのかな」
　その姿を見て俺は心の中でガッツポーズをした。
　我らの財布、いや頼れる御仁、村上殿だ。
「実は昨日流れてきた桃に……」
「桃太郎？」
　すみれが頬にクリームを付けて尋ねる。
　いいや、お前は男ではないので「太郎」ではないぞ。
「違う違う」
　ちなみに桃太郎というのは実は桃から生まれたのではなく、桃を食べて若返った爺さんと婆さんの営みによって生まれた子どもであ

る。
「で、天下の帝國軍人さんが子供連れで喫茶店とはどういう了見だい？」
店員にコーヒーを注文し、空いた席、ちょうど俺の真向かいで、八神の隣に座りながら村上さんが問う。
八神もすみれも顔見知りなのか特に驚いた様子は無い。
「書類の山に忙殺されている私を八神くんが無理矢理碁に誘いましてね。負けたほうが奢りという提案を半ば強引に飲まされ、敗れた私が奢るということになりました」
「非常に僭越ながら先ほどの左近さんの証言の食い違いを説明したいと思います。まず一つに書類に忙殺とありましたが、私が発見したとき左近さんは食堂で一人退屈そうに詰碁をしておりました。その二に私が無理矢理とありましたが、左近さんが無理矢理私を碁に誘ったのです。そして敗者が奢るという提案ですが、もちろん左近さんです。勝ったのは私ですがねッ！」
常日頃、敬語が苦手と言う八神が、敬語でまくし立てるように説明をしてくださった。
はい、その証言で間違いありません。
「要するに左近、サボりか？」
「Ｅｘａｃｔｌｙ（その通りでございます）」
「いかんね、いかんよ。お前を推した私の立場はどうなるんだ？もう少し真面目に働かないか？　お前の給料は厚生年金ではないのだから」
村上さんが意地の悪い笑顔で言う。
ぐうの音も出ないね。
「耳の痛い話ですね」
「本当だな。当事者がこんなんなんだから……」
村上さんがため息をこぼす。
長い付き合いだから分かる。村上さんがため息をつくのは相手を責める意味ではない。次の話題に移るときにワンクッション置く意

味合いがある。
「建設会社重役と内務省官僚の殺害、何か関係性が見えてこないか？」
さすがに情報が早い。既にその件が能力者がらみと睨んでいるようだ。
「見えませんね」
と言うより、そんな重役に官僚なんて俺には全く無縁の世界なのだ。
「佐々木氏は建設会社重役、三笠氏は内務省の土木局局長。この二人はとあるダム建設プロジェクトの中心人物だ」
「ダムですか」
さすが村上さん、こういう官僚の事や政治の裏側の話を聞くにはもってこいの人間だ。
「つまりは犯人はこのダム建設に反対している誰かということですか」
「そういうことになるな」
「左近さん、もしかしたら他の建設会社の差し金なんじゃないんすか？　プロジェクトに関わる人間が殺されたとなればダム建設は他の会社に委任される可能性も無くは無いですし」
先ほどまで黙ってコーヒーを啜っていた八神が言う。
すみれは話の内容についていけないのか、一人品書きを眺めて暇を潰している。
これ以上の注文は勘弁していただきたい。
「八神の言う考えもあり得るが、ダム建設に反対していた村民という線もある。どちらにせよこの件はそのプロジェクトが鍵になってきそうだな」
この事は帰って少将に報告した方がいいだろう。
「八神、すみれ帰るぞ」
そう言って俺たちは店を後にした。
財布は傷まなかったし、捜査の手がかりまで見つかった。最高だ。

どこかから村上さんの声が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

銀の玩具

ダム建設予定地は稲場村という人口百人にも満たない小さな集落である。

若年層の都市部への流失もあって村の存続すら危うくなっており、現在はわずかな農地を残された住民たちが守り続けている。

村人の大半はダム建設に反対しており、反対派の根強い抵抗により計画は当初よりも大幅に遅れている。三年前に計画されたダム建設はまったく進行してないと言っていい。

そして今回の事件、ダム計画の反対派が事件に絡んでいる事は間違いであろう。

だが、状況証拠しかない上に、犯人につながる手がかりは皆無だ。分かっている事といえば、現場で犯人らしき人物の目撃が無いことから、瞬間移動（テレポーテーション）を使った犯行の可能性があるということだ。ここからどうやれば犯人につながるかなんてまったく見当がつかない。

「えらく悩んでいるようじゃないか、少尉」

猫のようにテーブルに伸びた俺に少将が声を掛ける。

「ええ、ここ最近は酒飲むか、暴れるかしかしていなかったので、慣れない頭脳労働に参っております。こんなときは強いアルコールを飲んでリフレッシュしたいです」

「馬鹿野郎、ただ酒が飲みたいだけだろう」

「そうですよ！　飲みたいですよ！　少将が後ろに隠している電気ブランを！」

俺の酒探知能力は凄まじいぞ。酒のためならどんな堅い金庫であろうと破り、どんな屈強な門番であろうと乗り越えていくだろう。

「お前の鼻は警察犬か。まあ、元々お前と晩酌でも交わそうかと思ったのだがな」

「さすが少将、飲兵衛の気持ちが分かっておられる」

「まあ、飲みなぁ」

俺はグラスに注がれた琥珀色の液体を口にする。
電気ブランという名前の通りにしびれる口当たりだ。とてもきつい酒である。
ちなみにこの電気ブラン、チェイサー（口直しの酒）として生ビールを飲むらしいのだが、そんな気の利いたものはここには無い。ひたすらこの強い酒をあおるだけである。
「電気ブランってのはなぁ、ビリビリ痺れるから電気なんじゃねえ。電気ブランてのはなぁ――」
程よく脳にアルコールが回ってきたのか、上機嫌に少将が話し始める。
正直に言うと電気電気とうるさい。そういううんちくはすみれ相手にして欲しい。アイツなら目を輝かせて聞いてくれるだろう。
俺は事件について考える事にした。
ええと、ダムの計画が……。
「おぉ？　ちゃんと聞いているのか？　少尉」
「ええ、電気ブラン、電気ブラン」
ダムが電気ビリビリ。ダムダムダムの電気、伝記、電器、伝奇、元気。
今の俺の頭はアルコールで元気です。ハイハイ。
電気電気電気電気電気電気……電気？ダム？
「いいか、電気ブランの名前の由来はだな……、当時電気が――」
「少将」
「何だ？」
「ダムって何のために作ります？」
「はあ？」
俺の突拍子も無い質問に少将は戸惑いの様子を見せる。
「何のためって、そりゃあ飲み水の確保だろう」
「確かにそれもありますが、もう一つ忘れてはいけない事がありますよ」
そう言って俺はテーブルにある酒のビンを指差す。

「電気ブラン……そうか、電気か」
「Ｅｘａｃｔｌｙ（その通りでございます）」
水力発電、水の力を動力として利用するという考えは古代より続くものである。
日本での水力発電は一八九〇年の足尾銅山に始まる。これは世界で二番目の自家用水力発電である。
「ダム建設ということは水力発電が行われる。つまり電力会社が絡んでくるということですよ。当然今回のダム計画の推進派です。ということは、佐々木、三笠両氏のように犯人が狙う可能性もあるのではないでしょうか？」
あくまでも推測である。佐々木、三笠両氏の殺害によって稲場ダム計画は水泡に帰したのだ。いまさら電力会社の人間をどうしようと意味は無いのかもしれない。
「可能性があるとしか言えないな。だが、それに懸けるしかないだろう」
犯人への手がかりが皆無な状態ではこのわずかな可能性に懸けるしかないのだ。
「少尉、明日から忙しくなりそうだなあ」
少将が笑いながら言う。
少将、笑ってるけどアンタはもっと忙しくなるんだぜ。

◆

翌日、俺と少将は帝國電気を訪れた。
佐々木、三笠両氏の殺害から計画に携わる人間が狙われる可能性を考慮し、捜査の協力を仰ぐためである。
一八八三年に創業した帝國電気は、富国強兵政策による電力需要の増加もあり、業績は右肩上がりに増加し、すぐに日本最大の電力会社にまで成長した。今回のダム計画にも深く関係している。
「――つまり、今回の件でダム計画の関係者に何らかの危険がある、

そうお考えなのですね？」
男が真剣な表情で尋ねる。
歳は俺よりも上だが、それでも三十歳ほどでまだまだ若さが表情に表れている。
先ほど渡された名刺には「営業部部長　佐竹」と書かれていた。この若さでここまでの立場ということは相当なやり手であろう。
「あくまで推測の域を出ませんが、その可能性は十分にあります」
「成る程、そしてあわよくば犯人の身柄も確保できる。捜査と警護の両方を行う、非常に理にかなった提案ですね」
俺たちの提案は簡単なものである。計画の関係者であり、もっとも犯人が狙うであろう人物に秋水から護衛を付ける。単純だが一番効果的だ。
「万が一の事もあります。ぜひ協力をお願いしたい」
「万が一……いや十中八九、犯人は私を狙うでしょうね」
佐竹氏は含みのある笑いを見せる。
その若さとはまったく違う性質の笑みは、歴戦の智将が策をめぐらせるものと同じものだった。
「帝國電気はダム計画を諦めてはいない。佐々木、三笠両氏の件は非常に残念ですが、今回の計画がついえることはありません。それにもし犯人が捕まれば計画進行の追い風にもなりますし、何より捜査機関から護衛まで出されるということは、少し都合の良い解釈になりますが、ダム計画の後押しと捉えることもできます」
「では、今回の件で協力いただけるのですね？」
「よろしくお願いします。こちらとしても最大限の努力をいたします」
佐竹氏がにこやかな笑顔で右手を差し出す。その笑顔の真意は計れなかった。
俺はぎこちない笑みで差し出された右手を握った。

◇

佐竹氏の警護が始まって三日目となる。
昨日までの二日間はずっと会社に篭りきりだったためか、それといった危険も無く、平穏な二日間であった。
しかし、今日は関係省庁やダム計画の調整のために移動が多くなる。犯人が襲撃を考えているとするならば、今日が一番危険な日である。
「何事もなければ良いですね」
「ええ」
移動中の車内では取り留めの無い会話しかない。
俺も佐竹氏も運転手も緊張という一色の感情しかなかった。
唯一異なる色を示していたのはハルだけであった。緊張などどこ吹く風、自分は与えられた仕事をただこなすだけ、無駄な感情は一切無かった。
普段からポーカーフェイスを貫くハルだが、その無表情な顔はいつも以上に凛々しく、何者も寄せ付けない威圧感を漂わせていた。
「佐竹さん、これは不味いですよ」
いきなり運転手が言う。
「どうしたんだ？」
「どうやらタイヤがパンクしてしまったようで、これ以上は走れません」
偶然には思えなかった。今日という日にこのようなアクシデント、犯人たちには絶好の機会である。
「何とかならないのか」
「さすがにパンクしてしまってはどうしようもありません」
「くそう」
会社までは徒歩で約十分ほどある。たかが十分だが、されど十分だ。ここで下手に動いて良いものか……。
「行ったほうが良いでしょう」
先ほどまでほとんど話す素振りさえ見せなかったハルが提案する。

「確かに車外は襲撃の危険が大きいですが、このままここに留まっていたほうが危険です。動かない案山子ほど絶好の的はありませんよ」
「そうですね。社まではあと少しです。急げば危険は少ないでしょう」
「已むを得ませんね」
ハルの言い分は正しいだろう。動く的と動かない的、どちらが犯人に好都合かと問われれば後者だ。
俺は懐に忍ばせていた拳銃を取り出す。ＦＮブローニングＭ１９１０、軽量小型で携帯性に優れており、信頼性や性能も良好でかつ価格も安価、帝国軍人の間で大人気のベストセラー拳銃である。
その銀色の銃身は使い手には気品を兼ね備えた輝きを、標的には死を告げる無慈悲な光をもたらすだろう。
「物騒な物をお持ちで」
「あなたを狙う輩の方が物騒ですよ」
弾が装てんされているのを確認して再び懐に戻す。
超能力者相手でも銃は有効である。もっとも、悪意のある能力相手にはただの滑稽な玩具にしかならないが。

暴風警報

やや人気の無い路地に面した歩道、時計は午後の十時を指し示すというのに今夜は五人の人影があった。
俺と佐竹氏、そしてハル、その三人とは別に明らかな悪意を持った二人の影。
表情こそ読み取れないものの、彼らから発せられた殺気は周りの人間の毛穴に染み入り、気味の悪い汗をかかせるものだった。
「そこの方、少しお尋ねしたい事があるのですが」
男が声を掛ける。穏やかな声色とは裏腹に血なまぐさい雰囲気が漂っていた。
「そこの御仁、帝國電気の佐竹さんでございますね？」
「だとしたらどうなんだ？」
俺は忍ばせていた拳銃を取り出し、目の前の男に向ける。
しかし、男はそれに動じることなく話を続ける。
「そうですか、ではお願いがあります……死んでください」
やはりこいつらか、二人を殺害したのは。
俺は男の右足に向けて引き金を引く。
ダァンという炸裂音とともに銃弾の当たった舗装がえぐれ、辺りに硝煙の独特の臭いがたちこめる。
だがそこに男の姿は無かった。
「いきなり発砲とは日本も怖いですね。大丈夫ですよ、私は戦いませんから」
頭上から声がするので見てみると、男は建物の屋根にいた。到底人間の跳躍力では届かない距離、テレポートを使ったのだろう。
「……烈の風（れつのかぜ）！」
突如、荒れ狂う風が巻き起こる。俺はその暴風になすすべもなく吹き飛ばされる。
頭上に意識が向いていたこともあって、もう一人の存在を忘れて

いた。
受身に失敗した俺は地面に叩きつけられる。あばらの骨が軋む音がした。
「……今宵は、暴風にご注意下さい、ヒヒ」
巻き起こる風に服をはためかせながら男が気味の悪い笑い声を上げる。
そしてこちらに向かって来るかと思うと、身を翻し全く逆の方向へ走り出す。
これは罠だ。俺は本能的に敵の謀を察した。
「少尉、佐竹さんを連れて社に向かってください」
「これは罠だ！　一人で行っては敵の思う壺だぞ」
先日の手合わせでハルの実力は十分分かったつもりだ。ハルは強い。だが二対一、数的不利な状況では危険である。
「何を言っているんですか！　今回の任務はただの護衛じゃないんですよ。犯人の確保も目的なんです。ここで逃げられたら元も子もありません」
ハルは頭に血が昇って冷静な判断ができなくなっている。
各個撃破は戦いの基本、つまり戦力の分散は危険ということだ。ここは佐竹氏の安全を優先すべきである。
「死ぬぞ、迂闊な行動は止せ！」
俺は息巻くハルを静止する。
「少尉はあいつらが他の人間に危害を加えないと断言できますか？　一度人を殺めた者に躊躇なんて言葉はありませんよ！　私たちは帝都を護る人間です。命を失ってでも戦わなければならないんです！」
ハルはそう言うと俺の制止を振りほどき、闇に消えた犯人の背中を追いかける。
「バカタレがッ！」
俺は暗闇に紛れていったハルの小さな背中に罵声を浴びせる事しかできなかった。

いくら俺がだらしない駄目軍人とはいえ、少しは俺の言う事聞きやがれ。
「彼女は大丈夫でしょうか？」
佐竹氏が心配そうに尋ねる。
「分かりません。しかし、ああいうバカに限って生き残るものです」
そう言って俺は走り出す。
あの阿呆、絶対に死ぬんじゃねえぞ。

◆

後ろから少尉の叫び声が聞こえた気がした。よく聞き取れなかったが恐らく猪突猛進する私を引き止めるか、叱責する内容だったのだろう。
だが、私もただ敵が逃げたから追うのではない。少しは考えがあるのだ。
犯人は二人組みだが一人は空間移動者（テレポーター）、つまり能力を使った攻撃はもう一人の男にしかない。
私を誘い込んで他の仲間と袋叩きにするという線もあるが、それならば最初から数に物を言わせて囲い込んでしまえばいい。つまり援軍の可能性は限りなく低い。
それにしてもあいつらは本当に人間なのかと思うほどに速い。一人はテレポートなのでまだ分かるが、もう一人はまるで飛んでいるかのように速い。
追いつけないのではと私が一瞬諦めかけたとき、二人の動きが止まる。
「よく来たな、ヒヒヒ」
男が異常な笑いで私を出迎える。
中毒（ラリ）ってるのかこいつは、さっきから気味の悪い笑い声を上げていて不愉快だったのだ。
「一の太刀、雷（らい）」

私は駆ける。目の前の不愉快な顔に一撃を加えるため。
男に詰め寄り、上段から木刀を振り下ろす。雷をまとった剣が闇夜を照らしていた。
いかずちの速さで間合いを詰め、雷光の速さで剣を振るう、これが私の初太刀だ。
「おやあ、今夜は雷注意報と暴風警報ですかい？　ヒヒ」
しかし、私の剣は膨大な風圧によって阻まれる。圧倒的な空気の壁に私の剣速は打ち消されてしまうのだ。
ならばと私は構えを上段から正眼の構えに変える。
突きに風圧は関係ない。最小限の距離を行く突きは全ての剣技において最速を誇る。
私は渾身の速さで男の喉を狙う。
「キヒ」
不気味な笑い声を上げながら男の姿が霞む。人間とは思えない速さの動き。まるで何かに吹き飛ばされるかのような挙動である。
恐らくあいつは風を生み出す能力によって自分の体を吹き飛ばしているのだろう。それならば人間業ではない動きにも納得がいく。
「暴の風（あばれのかぜ）！」
男が私に向かって来る。いや、飛んでくる。
神風の速さで突進してきた男は私の腹にきつい一撃を叩き込む。
何という威力だろうか、全体重を乗せた男の捨て身ともいえる拳は私の五臓六腑に激震をもたらす。
逆流した胃液が口の中を苦い味で満たした。
「かはぁッ！」
私は思わず膝を付く。起き上がろうとするが膝が笑い、足腰が満足に立たない。
「どうした少女、警報はまだ解除されてなひぃヒヒヒ」
だからその笑いを止めろと言っているんだ。悪趣味だ。
私は木刀を杖代わりにどうにかして立ち上がる。本来は刀は神聖な物なのでこんなことはしてはいけないのだが、今回だけは特別だ。

うずく腹を気にしながら私は構える。右足を引き体を右斜めに向けて、剣を右脇に、剣先を後ろに下げた構え、脇構えである。
「二の太刀、雷電（らいでん）」
剣に雷が集まる。この業を使うのは久しぶりだ。
雷電は刀にたまった雷の気を剣を振るうと同時に放出する、剣でありながら離れた相手にも攻撃ができる技である。
「死にさらせッ！」
渾身の力を込めて剣を振るう。
「竜の風（たつのかぜ）！」
その瞬間、竜巻のような風が巻き起こり、地面の砂と塵を吹き上げる。
風のせいで吹き上がった塵によって辺りにはもやがかかる。男の姿が見えない。
その視界の欠如により私の剣の軌道が僅かだがずれる。
太刀筋のずれは雷撃にもずれを生じさせた。男の一メートルほど横で雷撃が炸裂する。
「外れですよ。ヒヒ」
笑い声とともに男は顔を醜く歪ませる。
笑い声も気に食わないが、その人を馬鹿にしたような笑い顔も気に食わない。
私は再び木刀を握り締める。
既に体力は限界を超えていた。木刀を握る力もほんの僅かしか残っていない。これ以上戦いが長引いては勝ち目がないだろう。
「もうそろそろお仕舞いにしますかヒィ、鎌の風（かまのかぜ）！」
先ほどの風のように竜巻が巻き起こる。
だが、さっきとは違う。巻き込むものは全て切り刻む、その名の通りのかまいたちだ。
「切り刻んでやるふヒィヒヒ！」
私は這い蹲りながらも必死の思いで横に飛ぶ。
完全にかわす事はできず、左の足に鎌が襲い掛かる。

「くうぅっ」
風とは思えないほどの切れ味で私の足は切りつけられる。
左足は無数の切創によって真っ赤に染まっていた。
夜だというのに私の血に染まった足はぬるりとした光沢を放ちはっきりと目視できた。
その朱に染まった足からは血が流れ、足元にワインボトルを落としたときのような血だまりができていた。
「これで最後だヒヒヒィ！」
再びかまいたちが私を襲う。
体力は尽き、足を負傷した今、この風から逃れる手立てはない。
私は思わず目をつぶった。目に映る現実から逃げても事実は変わらないのに。
辺りに沈黙が走る。
痛みもない。何も起きない。
「命尽きようとも戦い抜くのが帝都の守護者としての誇りならば、帝国軍人がおめおめと引き下がっていられるか」
沈黙を破るその声に私は固く閉じたまぶたを静かに開ける。

――片桐左近。

だがそこにいたのは私が忌み嫌い、侮蔑する人物ではなかった。
その後姿はいつも見慣れたあのだらしない姿ではなく、真剣を思わせる鋭い気迫に溢れた武士（もののふ）の姿であった。
あの風から私をかばったときに受けたと思われる無数の切傷からは、私の左足よりも多くの血がとめどなく流れていた。
「お前が与えた痛みと苦しみ、たっぷりお礼参りさせてもらうぜッ！」
全身を染める出血をものともせず、少尉は風のような速さで駆け出す。
私はただ呆然とその姿を見つめることしかできなかった。

暴風警報（後書き）

次話だけは是非とも読んで欲しいです。

闘争本能

体が熱い。だが不快な火照りではなく、むしろ心地の良い熱だ。
体中の血肉が沸き踊り、今から始まる戦闘を心待ちにしていたかのように鼓動が跳ねる。
先ほど受けた傷の痛みはない。痛みという感覚は不要とでも言うように、痛覚以外の感覚が自己主張を始める。
とめどなく溢れるアドレナリンは、俺の中に眠る戦いという名の野生を呼び覚ます。
Ｆｉｇｈｔ　ｏｒ　Ｆｌｉｇｈｔ、闘争か逃走か。野生の世界ではこの二つの選択肢しかない。
だが俺は違う。元から選択肢など無い、肉食動物が闘争を選ぶように俺の選択は必然と闘争となるのだ。
「今度はお前かヒヒィィ！」
男も興奮の混じった笑いを上げる。
その笑いも俺の昂ぶる気と同じように、呼び覚まされた闘争本能によって自然と出ているのだろう。
「暴の風！」
暴れ狂う風とともに男が突進してくる。
俺も正面から男と向き合う。チマチマした遠距離戦（アウトファイト）ではなく真っ向勝負の肉弾戦（インファイト）は古来より雄に伝わる戦いだ。
一匹の雌をめぐる二匹の雄の死闘、退くことを知らない雄の自尊心の衝突、幾億もの競争相手を振り切り蹴落とし辿り着く生命のゲーム、この世で戦いを知らない雄はいないのだ。
「鉄血！」
流れ出た血が右手に集まり凝固する。その硬度は鉄にも劣らない。
男の拳に、血に染まった俺の鉄の拳を合わせる。
重なりあった拳と拳が骨や筋肉の繊維の一本一本にまで衝撃を伝える。

「ひひひぃあァァっ！」
男の悲鳴交じりの笑い声が闇夜に響く。
その叫び声が鼓膜より俺の神経を刺激し、脳内麻薬の分泌を促進する。
全身の毛穴が開き、そこから漏れ出しそうになるほどの快感が俺を襲う。
「どうした？　もっと笑えよ。右手が潰れたなら左手で殴り掛かればいだろ」
「いひひいひぃひ！　お前の……拳……鉄ッ！」
男は苦悶の表情を浮かべながら右手を押さえている。
しかし常人とは違う苦悶である。口元だけは笑っているのだ。
「この……戦闘狂がッ！」
渾身の力で男の膝頭を蹴る。
足先の一点に集中した力が男の膝を砕く。
トーキックは最小限の動作で骨を砕くほど爆発的な破壊力を持つ。相手の運動機能を奪うにはうってつけの蹴りだ。
「お前……絶対に殺すっ！」
突如、体験した事のない風圧が全身を襲う。
俺はなすすべもなく地面に叩きつけられる。
この前に痛めたあばらが悲鳴を上げる。先ほどの衝撃で間違いなく折れただろう。
「ヒヒッヒッヒィヒ！」
さらに俺に無数の鎌の風が襲う。
肉がえぐれ鮮血がほとばしる。腕の血管が損傷したのだろう、血が止まる気配はない。
辺り一面は俺が流した血とハルの足から流れる血によって血だまりができていた。その血だまりには夜空に光る月が怪しく映されている。
少し血を出しすぎた。先ほどまで高揚していた神経が、少しずつだが確実に鈍くなってきている。

まだ闘争心が失われることはないが、その気持ちとは裏腹に身体能力は落ちてきている。俺は思わず膝をつく。
その様子を見た男が満足げに笑う。
「ヒヒイヒいヒヒ！」
不気味な笑いとともに、男が足を引きずりながら近寄ってくる。
俺の体力の限界を悟ったのだろう。とどめは己の手で刺す腹づもりらしい。
男は左手で俺の首を絞める。片手とはいえその力は強い。
「くはぁっ！　かっ……」
声にもならない呼気が俺の口から漏れる。
そのまま男は俺に覆いかぶさり、全体重を乗せ俺の息の根を止めにかかる。
俺も男の腕を振り払おうと必死にもがく。
血だまりでの攻防、俺も男も頭の先からつま先まで血に染まっている。
その様は血の池に落ちた亡者どもが、我先にと岸に辿り着くために他人を押しのけひしめき合うようだ。まさに地獄絵図である。
だが、この血の池は俺にとっては味方だ。

――束血（そっけつ）！

その瞬間、辺りに広がる血が蛇のように形を帯び、獲物の骨を砕くように男の体の自由を奪う。
男の腕から逃れた俺は、四肢の自由を失いながらももんどりをうつ男を眺める。
足掻けば足掻くほど束縛は強まる。今、男を締め付けているものは血ではない。確かな生を持った大蛇なのである。
「お前、その能力っ……、操ってる、なッ！」
男が白目をむきながら吐き出すように言う。
それでもなお抵抗する男の体を蛇は絞める。先ほどまでの俺と同

じ苦しみが男を襲う。
「エグいですね。秋水の人間は」
屋根から傍観するもう一人の男がにやけながら言う。
仲間がやられているというのにどうしてここまで笑っていられるのだろう。俺は男の神経を疑った。
今思えばあの男は一度も手を出さなかった。手を貸す必要がないとでもいうのだろうか、一体何故だ。
「仲間を見捨てるお前も十分エグいな」
「仲間？　見捨てる？　何を言っているんですか、私はただ依頼に沿って動いているだけです」
依頼とは一体何の事だ、何か裏があるのか。そんな俺の疑問を見透かしたかのように男が言う。
「佐々木、三笠、佐竹、この三人の殺害のちょっとしたお手伝いをしているだけですよ。目撃証言もなく、アリバイ工作だって可能となればどこからも引っ張りだこですよ。ただ人を飛ばすだけなのにね」
超能力者の中にはその能力を利用し様々な悪事を働く者もいる。能力を使い窃盗や殺人をするものもいれば、この男のように他人から報酬を受けその能力を使う者もいる。一般人には無い特異な能力はそれだけで金になるのだ。
スポーツ、ビジネス、そして犯罪とさまざまな分野に応用が可能な超能力は、正しく使えば使い手は多大な恩恵を受けるが、悪用すれば周囲の人間を傷つけるのである。
「俺が秋水の人間だと分かっているんだろ？　悪役がベラベラと話すのは小説の中だけだぜ」
「そうですね。あなたのお仲間もいらっしゃったようですし、おいとましますか。ああ、そこの男は煮るなり焼くなり好きにしてください。もう用済みですので」
男は音も無く消え去った。
しかし、最後に見せた狂気じみた笑みはしっかりと俺の脳裏に焼

きついただろう。
ああ、きつい。目の前が霞んできやがったぜ。
その瞬間、言葉に出来ないほどの寒気と痛み、疲労感が津波のように押し寄せてきて俺の意識は途切れた。

◆

今、私の知的好奇心は全て一人の男に向けられていると言っても過言ではないでしょう。
あの男、片桐左近といいましたかな。いやはや、実に興味深い。まさか自分の血液を操る能力者がいるとは。
血液を鋼鉄並みの硬度に変えたり、まるで生き物のように血を自由に動かして攻撃をしている。あれから察するに相当強力な念動力をお持ちのようだ。
特に血液の硬度増強は、血液に念動力を送り固形化することによってあの強度を実現したのでしょう。その発想と、それを実現する能力には脱帽しました。
そしてあの戦闘能力、惚れ惚れしましたねえ。常人ではありえないほどの体力と破壊力、さらに身の毛がよだつほどの闘争心、彼を前にしてはどんな歴戦の雄も恐れおののくことでしょう。
それにしてもあのような人物をどうやって軍人に仕立て上げ、秋水に潜り込ませたのでしょう。裏で糸を引いている輩でもいるのですかね。全く嫌な事をしてくれます。
秋水に所属しているとなると何度も顔を合わせることになりそうですね。せっかくなので一度お茶でもご一緒したいものです。まあ、無理ですがね。
「筧様、旦那様がお待ちです」
「ありがとう」
私は女中に礼を言うとそのまままっすぐ進み、一番奥の部屋の戸を開ける。

「お待たせしました。村上さん」

闘争本能（後書き）

全然超能力バトルじゃない。どこのジャンプ漫画ですかって言いたくなるほどに肉弾戦。

梅薫る

そこはいつもと変わらない俺の部屋であった。
六畳の部屋には少将からくすねた酒の空き瓶が三、四本ほど転がっており、飾り気の無い木の机が部屋の物寂しさを一層引き立てていた。
あの夜から二日、俺は全身にミイラのように包帯をまかれてベットに横になっていた。傷の痛みよりもこの動きづらさに心地の悪さを感じる。
全身の無数の切創により大量の出血があったそうだが命に別状は無く、一晩寝ていたらすぐに体調は回復した。流石にあばらの方は骨なので一晩では治癒しなかったようだが。
昨日少将に聞いたのだが、村は帝國電気をはじめとしたダム関係者から相当悪質な嫌がらせを受けていたらしい。村人の中には嫌がらせに耐えかねて土地を捨てる者や、ストレスに耐え切れず心を病んだ者もいたそうだ。
人を殺めた事は社会的にも倫理的にも決して許される事ではないが、男にとっても村人にとってもそれが正義だったのだろう。
しかし、その正義は村人に幸福をもたらすことは無かった。男の逮捕は村人のダム反対の希望を打ち砕き、代わりに諦めという選択を与えた。正義は負けたのだ。
そう考えると俺は悪なのだろう。村の正義を打ち破った悪なのだ。しかし、それと同時に世の悪を退治した正義なのでもあろう。
「左近さーん、生きてますか？　さっさと飯食わないと無くなっちゃいますよ」
部屋の外から八神の騒々しい声が響く。
「あー、今行く」
止めた、止めた。今は小難しいことを考えずに飯を食うことだ。
俺は八神と二人で食堂へ向かった。

食堂もいつもどおりの光景が広がっていた。無駄に広いのに少ない人、おばちゃんの作る尻尾の焦げた焼き魚、八神の頼むきつね色のトースト、何の代わり映えも無い平穏な朝の時間はいつも心が落ち着くひとときだ。

ただ一つ違うといえば、いつも俺をゴミを見るような目で睨みつける少女の姿がないことだけだろうか。

「ハルはどうしたんだ？　寝坊か」

麦飯と焼き魚を味噌汁で流し込んでから、俺はコーヒーをすする八神に尋ねる。

「左近さんじゃないんですから」

何を言う、俺は寝坊した事なんて無いぞ。ただ人より少しだけ遅く起きているだけだ。

「あれからずっと部屋にこもってますよ」

「何で？」

ハルはそんじょそこらの子どもよりもよっぽど丈夫な健康優良児だ。病気で寝込んだりはしないし、怪我だってあの時の打撲と足の傷しかないはずだ。

「あの夜の戦闘からずっと塞ぎこんだままですよ。二日間食事もとってないんです」

八神が心配そうに言う。

「へー、二日間も。大変だねー」

「全然そう思ってないでしょ」

「とは言ってもなあ」

ここで俺が心配したところで何の意味も無い。「余計なお世話だ」とハルに睨まれるのがオチだろう。

「左近さん、一応年長者なんだから心配ぐらいしましょうよ」

八神が呆れ果てた表情で言う。

「オーケイ、オーケーイ、俺に任せときな。あっという間に凍てついた少女の心を溶かしてやるからよ」

残りの麦飯と味噌汁を一気にかきこんで朝食を終了する。
今日のご飯もまことにおいしゅうございました。焦げた魚はよろしくないが。
「火に油を注がないでくださいよ」
火に油を注ぐ？　結構な事じゃないか。思春期は燃えてるくらいが丁度良いんだよ。

◆

ああ、私は馬鹿だ。ばかだ。バカだ。馬鹿だ。本当に愚かだ。
自分自身に罵声を浴びせながら私は布団に頭から潜り込み芋虫のように丸まる。が、すぐに息苦しくなり顔を出す。
罪悪感と自己嫌悪が私の肺を満たし、体の隅々にまで染み渡る。
あの夜、私は少尉が止めたにもかかわらず、自分勝手な考えで男を追跡し、挙句の果てに返り討ちにあった。
私なら勝てる。私一人で勝てる。あの男の力は必要無い。そんな根拠の無い自信を振りかざし醜態をさらした。取り返しのつかない汚点だ。
あの時、私の心の中に少尉を軽んじる気持ちが微塵も無かっただろうか。いや違う。私は侮蔑というレンズ越しに少尉を見てきたのだ。
この男にだけは負けない。こいつになんか頼らない。人を信じるという心を忘れ、浅はかな対抗心を燃やしていた私はレンズ越しの虚像を実像と信じ、片桐左近という一人の人間の本質を見落としていたのだ。
初めて少尉に会ったのは桜が舞い散る上野だった。なんてだらしない人なんだ。この人は軍人としての自覚も誇りも無いのだろう。そう思うのは無理もなかった。
初めて少尉と剣を交えたのは春の日差しが心地よい日だった。あのときの身を引き裂かれるような威圧感と、鬼のような目つきを私

は覚えている。
　ああ、この男は本物だ。本物の剣士だ。勝ち負け以上に大きな何かを私は感じた。しかし、その実力を私は素直に認めることが出来なかった。少尉を軽蔑する事によって己の哀れな自尊心を守ろうとしたのだ。
　そしてあの夜、私は己のちっぽけで脆弱なプライドは粉々に砕かれた。そのとき初めて私は認めた。少尉の強さと自分がいかに子どもじみており盲目的だったかを。
　今なら父上の言葉が分かる気がする。「剣にはそれを振るう者の全てがあらわれる」、それは別に聖人君子になれと言う意味ではない。素直に剣を振る事が大切なのだ。自分のありのままの気持ち、純粋な一つの感情によって動くことだ。
　謝りたい。今の私の素直な気持ちだ。だが、その思いとは裏腹に私の体は動かない。
　怖い、あの人と正面から向き合うのが恐ろしい。ごめんなさいというその一言を言う勇気がない。
　結局私は変われないのだ。不甲斐ない自分への怒りを枕にぶつける。乾いた音が部屋に響く。そして静寂が訪れる。
　その静寂をドアのノックが打ち破る。コンコンコンと軽く三回ノック。だが今の私にはそれに応じる気力は無かった。
　コンコンコンともう一度ノックが響く。今度は先程より強めのノックだ。誰だろう、すみれかな。私は一人の少女の姿を想像した。だが、私は応じない。今の彼女の純粋な思いやりはどんな言葉よりも心に突き刺さる行為なのだ。
　止めて、私なんかに構わないで。私は再び布団に頭から潜り込み芋虫のように丸まる。
　再びドアを叩く音。今度はコンコンコンなんて優しい音ではない、ゴンゴンという拳をぶつけるような音だ。
「ヘイヘイ、悩める思春期ガール！　開けろーい」
　その声は私の予想していた人物とは全く違うものだった。

――片桐少尉、

私が一番謝りたい人物。そして一番顔を合わせたくない人物。

「な……何でっ！」

思わず声が出てしまった。予想外の声の大きさに自分が驚く。

「何でって聞くお前が何で？　二日間も部屋から出てこないヤツがいたら誰だって心配するだろ。それよりも開けろ」

ガチャガチャとドアノブを回す音がうるさく響く。

「いいです。帰ってください」

あんなに迷惑をかけたのに、あんなに失礼な態度をとっていたのに、何でこの人はここいるんだ。

「そんな冷たい態度には慣れてるぜ。おじゃましまーす」

施錠していたはずのドアが開く。何故だ、ちゃんと鍵はかけていたはずなのに。

「鍵が無いなら作ればいいじゃない」

どこぞのフランス王妃のようなことを言いながら少尉が入ってくる。

「なんだぁ？　布団なんかかぶって、風邪でも引いたのか？」

「違いますッ！」

何で入ってくるんだよ。どうして帰らないんだよ。私はさらに布団に深くもぐる。貝のように殻にこもり、外界との接続を遮断する。

「頑張ったな」

少尉は泣き止まない子どもをあやすような口調で言う。

予想外の言葉に私は一瞬訳が分からなくなった。どうして怒らない、どうして責めないの。私の中から罪責感と自責の念がとめどなく溢れ出てくる。

「……すみませんでした」

布団から顔を出し、ベットの上に正座で少尉と向き合う。

「上官の命令に反し単独行動、護衛対象者を危険に晒した。これは

流石に不味いわな」
　ぐうの音も出ない。私は上官の命令に逆らったのだ。たとえ私が学生という身分であっても処罰が下るだろう。そんなに現実は甘くない。
「どんな処罰でも覚悟しています」
「そうか」
　言ってみたのは良いが、やはり罰を受けるのは嫌だ。こういう甘えが私の弱さなのだろうか？　もっと精進しなければ。
「小早川ハル協力生、本日より一週間の謹慎を命じる」
「は？」
「聞こえなかったか？　一週間謹慎だ」
「……わかりました」
　軽い、こんなに軽くて良いのだろうか。私は肩透かしを食らったような気持ちになった。
「……で、ここから少尉の俺としてじゃなく、片桐左近という俺からなんだけど」
　そう言って少尉が廊下から原稿用紙の束を持ってくる。嫌な予感がした。これは世間で言うアレではないだろうか。
「お前の予想通りだ。学生が一番大嫌いな反省文でございます」
　反省文、それは網。もがけばもがくほど己の身に絡みついて離さない、四〇〇もの升目が織り成す絶対の束縛は、最後の一文字を書き終えるまで解かれることは無い。さらに先生という最後の審判が待ち構えており、その朱印が押されるまで安息の二文字は無いのだ。
「なんと四〇〇字詰め原稿用紙十枚という大出血サービス。俺が海軍学校にいた頃は良く書かされたもんだぜ。使った原稿用紙の数だけなら夏目漱石にだって負けてない自信がある」
　そんな自信はどうでもいい。反省文……だと？
「ちなみに反省文という考えは、書く側から書かせる側に回ってみたいという俺の願望のせいです。他意はありません」
「完全な私情じゃないですか」

「あ？　そんなことはどうでもいい。要するに誠意だよ、誠意。お前がどれだけ反省してるかをその原稿用紙におもむくままにつづってくれれば結構。じゃあ、頑張りたまえ」
そう言って少尉は去っていった。
「ふざけるな」
私はそう言って例の原稿用紙に視線を落とす。するとそこには四〇〇の升目とは別に勢いのある筆使いで書かれていた。
『絶食は身体に悪影響を与える。これ以上減量したら骨と皮になるぞ。特に胸は女にとって死活問題なので注意しろ。これ以上減ると男と間違われる。　片桐左近』
うるさい、私だって気にしてはいるのだ。
その原稿用紙を丸めて投げ捨て、ふと机に視線を移すと、いつの間に置かれていたのだろうか、拳ほどの大きさの握り飯が皿に盛られていた。
少尉も粋な事をしてくれるではないか。私は皿の上の握り飯を頬張る。
「すっぱ」
梅干は嫌いだ。

筧大尉

この屋敷を訪れるのは何年ぶりだろうか、私が軍を止めてから五年は経っているので、もう少し前かもしれない。
「遅いぞ、筧大尉」
部屋に入るなり村上さんが、待ちくたびれたように言う。
筧大尉、この呼び方も久しぶりだ。
「元大尉です。わざと言っているでしょう？」
そう言って私は座敷に腰をかける。
「私がその気になれば大尉に復職する事だって可能だ。お前が望む望まないに関わらずな」
村上さんはそう言っていつもは厳つい顔を緩める。
これが冗談かどうか分からない。この人は本気でそういうことをするから怖い。
「職権乱用ですね。あなたは政治家です。軍にちょっかいを出すのはよした方がよろしいですよ。そういうことをよく思わない輩も少なからずいるのですから」
「老いぼれ鴉のことか？　いいかげん隠居でもしてくれればいいものを」
「そういう発言の事を言っているんですよ。敵は少ない方が良いでしょう？」
「ああ、そうだな。そして味方は多い方が良い」
村上さんは茶を飲んで一呼吸置き、こう言った。
「筧、俺の部下になれ」
相変わらず突然な人だ。いつもは回りくどいのにこういうときだけ直球勝負、緩急が激しい。
「本気ですか？　自分で言うのもなんですが、私ほど信頼できない人間もそういませんよ」
「分かってるよ。お前が信じているのは一にも金、二にも金だ。で

も逆に言えば一番確実な人間だってことだ。金は人を裏切らないからな」
物には心も感情も無い。つまりどんなファクターが作用しようとも、裏切られる事は無いのだ。私もそれは身をもって知っている。
「筧、お前、俺に忠実な駒になれ。俺の意のままに動け」
そう言って村上さんは後ろに置いていたカバンを机の上に置く。その音から中身がどれだけ詰まっているか推測するのは容易かった。
「この金が俺とお前を結びつける絆だ」
「まいどあり」
村上さんからカバンを受け取る。これで私は契約という鎖に縛り付けられることになったのだ。
「さあ、これで晴れて私は村上さんの部下になったわけですが、何をすればいいのですか？　機密情報でも掴んでくるのですか？　それとも政敵を暗殺でもしてくればよろしいのですか？」
「おうおう、物騒な事を言うな。別にそんなことはしなくて良い。頼みたいのは一つだ」
一つのことにあれだけの金額ということは相当な案件なのだろうか。
「烏丸伝吾郎、この名前を知らないわけないよな？」
「ええ、もちろん知っていますよ」
元陸軍大尉の私が陸軍中将を知らないはずがない。
「烏丸は能力者ではないが、超能力に関して深い理解を持ち合わせていてな。超能力の有用性、利便性を知り尽くしている」
それは私も知っていた。烏丸中将は超能力という力が世間に認知されるよりも前からその存在に着眼し、独自の研究や考察を行っていたらしい。当時は周囲の理解も無く、いわれのない非難や中傷も受けたそうだ。
「その能力を使えば戦闘や諜報といった行動を潤滑に、かつ容易に行うことが出来る。それはお前が身をもって知っているだろう」
「ええ」

能力の使い方によっては能力者は銃を持った兵よりも恐ろしい存在だ。
「超能力と火、私はこの二つはとても似ていると思うのだ」
その表現はなかなかおもしろい。
超能力とは人類の新たな可能性を秘めた力、正しく使えば更なる叡智を手に入れることが出来るだろう。しかし使い方を間違えれば取り返しのつかない傷跡を残す事になる。まさにプロメテウスから与えられた火そのものだ。生きるために生まれた武器はただ権利を奪い合う道具に成り下がり、姿を変えて争いを生み、人々の心に穴を開けている。
「もし、この力を軍事的に使ったらどうなると思う？」
「馬鹿げていますね。理論的に解明されていない技術を兵器に転用するなんて不可能ですよ。それに圧倒的に人材が足りない。軍事目的で能力者を集めたとしても人が不足するだけです」
能力者は兵器や兵士とは違う。作ったり鍛えたりして生み出すものではないのだ。到底戦力になるほどの人数をそろえる事は難しいだろう。
「だが、それを烏丸はその絵に描いた餅のような計画を実行しようとしている。妄想や狂言ではない、大真面目でだ。現に実験的ではあるが小規模の能力部隊を私費を投じて構成している」
「どうしてそこまで執着するんですか？　まるで現実を見ていない」
中将の超能力に対する執着は一般人から見れば酔狂にしか思えない。
「相川事件は知っているか？」
「名前と概要程度しか知りませんね」
相川事件、確か二十年ほど前に起きた事件だ。当時は日露戦争の賠償問題に対する不満から暴動が多発していた。相川という犯人の名から相川事件と呼ばれている。この事件もその一つだ。
「あれはただの事件ではない。公には軍関係者の暗殺未遂事件とだけ言われているが、実際には能力者による犯行だった」

「それが何かあるんですか？」
「あの事件の当時中佐だった烏丸は、賠償問題に対する暴動についての話をするために、襲撃された関係者宅に部下数人を連れて訪れていた。その部下の中にある男がいたのだ。一部にしか名は知られていないが、非常に優秀で聡明な男だった」
「その男の名は？」
「霧島鉄山、知っているのは私や当時の関係者だけだろう」
「へえ」
　その男の事も気にはなったが、話の腰を折ることになるのでそれ以上は聞かないことにした。
「話を元に戻そう。――犯人の襲撃時、烏丸たちは拳銃などで応戦したのだが、全く歯が立たなかったそうだ。皆が死を覚悟したとき、霧島の能力で犯人の身柄の拘束に成功したのだ。そのときの光景を目の当たりにした烏丸は超能力犯罪の危険性と、能力の戦闘に対する有用性と実感したらしい。その経験からその後の秋水設立にも一役買うことになった」
「でもそれならば秋水をそのまま能力部隊として陸軍に編入すれば良いのでは？」
　陸軍中将という立場ならばそのようなことは赤子の手を捻るくらい簡単だろう。
「あくまでも秋水は能力犯罪への対抗勢力、軍事的な意味合いはない。それにそうなれば張本少将が黙っていないだろう。秋水は烏丸の私物ではないし、ついでに言えば軍に編入できるほどの人数はいないしな」
「なるほど、烏丸中将の目的やそれを取り巻く状況は大体分かりました。それで、今回の依頼とはどういったものなのですか？」
　相変わらず話が目的と違う方向に逸れてしまいがちだ。
「筧、今日付けでお前は陸軍大尉に復職だ。烏丸の能力者部隊計画とその周辺人物を探って来い。いいな」
「了解！」

反射的に右手をさっと額に持っていく。今の私は軍人なのだ。

永久死体

春だというのにまるで夏のような暑さであった。
うだるような暑さにうんざりしながら俺はワイシャツのボタンを外し、うちわで胸元に風を送る。こんなときは冷たいアイスキャンディでも食べたいものだ。
ふと目にした温度計の目盛りは二十五度を少し超えたところを示していた。
日本はいつから熱帯気候に変わったのだろうと思いながら、俺は暑さを紛らわすために温度計に息を吹きかけた。効果はなかった。
俺の部屋は南に面している。そのため今日のような暑さだと室内はまさに蒸し風呂状態になってしまうのだ。
「干からびるわい！」
俺は自室からの避難を選択した。

食堂は涼しかった。俺の部屋が蒸し風呂なら、ここは軽井沢のリゾート地といっても差し支えないほどの快適空間である。
周りを見渡すと、この快適空間を求めてやってきた人がちらほらと見受けられた。まるで砂漠でオアシスを求めて彷徨う旅人のようだ。
「あ～あ～～～～～～」
何やら小刻みに揺れた声が聞こえる。ビブラートのかかった少女の声だ。
「やあ、少女」
「ざご～んん～～」
声の主はすみれだった。だが肝心な事はそれではない、すみれの目の前にある物が重要なのだ。
「その文明の利器は何だ？」
「ぜんぶ～ぎ～」

扇風機、それは人々に涼しげな風を届けてくれる、暑い夏の味方。四枚の羽が織り成すプレリュードは冷涼と共に夏の訪れを告げ、秋の訪れと共にその姿を消す。
「どれ、おじさんも涼ませてもらうとしようか。あ～あ～」
扇風機に向かって発した俺の声は、間抜けなビブラートで辺りに響く。
この光景を見た者は子供じみていると笑うことだろう。だが、子供心を忘れないということは大切なことなのではないかと俺は思う。幼い頃の俺はメンコで弱肉強食という社会体質を知り、鬼ごっこによって体力、状況判断能力を培った。子供だからと軽んじてはならないのだ。
「大の大人が何しているんです」
「ワレワレハウチュウジ～～ン、見れば分かるだろ？　遊んでるんだよ」
これをしない子供は子供ではないのだ。子供の皮をかぶった老人か何かに違いない。
「子供ですか？　いい歳して恥ずかしくないんですか？」
「これを恥ずかしいと思う羞恥心が恥ずかしいのだ。そんなつまらない見栄は必要ない。さあ、ハルも素直にアーアーするんだ」
「しませんよ、そんな子供みたいなこと」
「……ハルもさっきアーアー言ってたよね？」
横からすみれが言う。
「な、何言ってるのすみれ、言ってないよ！　うん、言ってない、言ってないよね？」
「言ったよ」
子供とは残酷なまでに正直で純粋な生き物だ。思わずハルに同情したくなった。
「すみれ、何かかわいそうだからその辺にしとこうな」
「わがっだ～～～」
そう言ってすみれの関心は再び扇風機へと移った。

「……言ってませんよ」
ハルが顔を膨らませる。
「もういいよ、めんどくせえ」
ちょっとからかってやろうと思ったりもしていたが、俺の良心が痛むので止めた。
「そんなことよりも、少将から伝言がありますよ」
「何だ、酒の買い置きが切れたのか？　この前失敬したときはまだあったのにな。今日は暑いから出たくないんだけど」
「何でもお客さんが来るそうで迎えにいって欲しいそうですよ」
「拒否権は？」
「ありません」
少将もこんな日に言うなんて嫌がらせではないだろうか。明日の朝刊は『海軍少尉、ミイラで発見。原因は猛暑』なんて記事が出ていることだろうに。
「寄り道しないでくださいよ」
俺は子供じゃないぞ、子供心を忘れない大人だ。子ども扱いしやがって、まったく。暑いからラムネでも飲んでくるとしますかね。

◆

焼け付くような陽射しが俺の背中をじりじりと焦がす。蝉の鳴き声まで聞こえてきそうなほど暑い。
道行く人々もこの猛暑のために薄着であった。
そんな暑さの中で全く対照的な涼がこのキンキンに冷えたラムネだ。
この炎天下の中での一本は、世界中のどんな名酒や珍味にも勝る、至高の一品と言えるだろう。
俺は飲み口のラムネ玉を押す。透き通ったガラス玉が、同じように透明な炭酸の海に沈んでいく。この玉がラムネの命といっても過言ではない。

そして一気に、なおかつ玉が飲み口を塞がないように注意しながらラムネを口に流し込む。
その炭酸の刺激と甘味の絶妙に絡み合った味わいは、一口で俺の体にまとわりついた熱気を吹き飛ばした。
「っはぁ！」
爽快感。まるで新しい下着をはいたばかりの正月元旦の朝のように爽やかな気分だ。
「……暑い日のラムネもなかなか乙なものですね。子供の頃を思い出します」
「ええ、全く……どちら様で？」
いつの間にか俺の隣には一人の男がいた。しかも驚く事に、この暑さの中でも律儀に立襟の制服を着ており、腰にはサーベルを帯刀していた。
「私……新橋署外勤課巡査、影山昭久と申します」
男は低い声で言う。その顔は生気というものが微塵も感じられず、まるで死体のようであった。
「はあ、巡査さんが何の用で？」
生憎だが俺は法を犯すような行為はしていない。
「つかぬ事をお聞きします。片桐左近さんでございますか？」
「そうですけど……」
名前まで割れているとは、実は俺は知らず知らずのうちにとんでもない大犯罪でも犯していたのか。
「新橋署より使いとして参りました」
「ということは、お客さんというのは貴方でしたか。いやあ、てっきりお縄を頂戴するのかと思いましたよ」
「……心当たりがおありで？」
「滅相も無い」
記憶にある悪行といえば試験問題をガリ版で刷ってばら撒いたくらいかな。
「立ち話もなんですし、秋水に行くとしますか」

「そうですね。この暑さは……つらい」
影山巡査は手で扇ぎながら言う。
暑いと思うなら脱げば良いのではないだろうかと思ったが、暑いので口に出すのは止めた。

◇

帰ってくるなりすぐに少将に呼ばれた俺は、少将や影山巡査と共に少将の部屋にいた。
「まずはこれを見て下さい」
そう言って影山巡査は持っていたカバンから二つの小さな包みを取り出す。
包みを外すと剥製のようにも見える、二体の猫の置物が姿を現した。
「これは何なんだ？」
少将が尋ねる。
「ミイラ……ですよ」
「ミイラというと、あのエジプトのミイラのことか？」
「その通りです」
いくら暑いからとはいえ、猫が干からびてミイラになってしまうような暑さではあるまい。常識ではありえない。
「この二体のミイラはいずれも損傷がほとんどありません。また、急激な乾燥によりミイラ化したことが分かっています」
「急激な乾燥って……生き物をミイラ化するほどに乾燥させるなんて人間業じゃないですよ」
「だから……ここに来たのです」
影山巡査が言う。
「能力者か……」
「しかし、猫のミイラってだけでは事件にはなりませんよ。少なくとも私たちが動くような案件では」

正直に言うと暑いから仕事したくないだけなのだが。
「私たちもその程度でそちらの手を煩わせる気はさらさらありません」
「と言うと？」
「実は三日ほど前からある少年の捜索願が出ているのです。そして昨日、その少年の所持品と思われる物が発見されたのですが、その現場にあったのがこれですよ」
猫、いや猫だった物と言うべきか。俺は二体の死骸を眺める。
動物をミイラにするなんて昔のエジプト人じゃあるまいし……。
「ということで我々と共に少年の捜査協力をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」
「少尉、頑張れよ」
少将が俺の肩にポンと手を置く。
即答ですか！
「俺一人ですか？　もしも能力者との戦闘になったらどうするんですか？」
「大丈夫だ、捜査協力だけだ、問題ない」
「……協力していただけると言う事でよろしいですね？」
結局俺には拒否権は無いのです。まあ当たり前なのだが。
「ええ、もちろん。このアル中でよければいつでもお貸ししますよ」
アンタもアル中だろう。この前だって一晩で一升瓶空にしたくせに。
「ご協力感謝します。では片桐少尉、さっそく捜査を始めましょう。善は急げと言いますし」
「はあ……」
見た目に反して影山巡査は意欲的なようだ。俺の勤労意欲が異常に低いだけかもしれないが。
俺は巡査に引きずられるようにして部屋を後にした。

永久死体（後書き）

第一話にＭｉｃｋさま作の扉絵を貼っています。

駄菓子屋の誓い

時刻は昼過ぎ、一日のうちで一番気温が高くなる時間である。
さんさんと輝く太陽は、どうやら「休む」とか「一服」という言葉を知らないようで、容赦なく俺の背中を照らしていた。
この暑さですっかり体力を消耗した俺は、ただひたすらに俺の前を歩く影山巡査の背中を付いていく。
俺よりも頭一つほど高く、枯れ木のようにひょろひょろとしたその後姿は、疲れを知らないのか、それとも彼の仕事に対する真摯な姿勢のせいなのか、黙々と歩を進める。
「ここが現場です」
薄暗く人通りの少ない路地であった。
辺りを見渡すとちらほらと三毛や黒などの姿が見受けられた。
仲間が減ったからなのだろうか、心なしか琥珀色の目は物寂しげに見えた。
「影山巡査、来たのは良いけれど、みんな持って行かれてて何も無いんですけど……」
「……盲点でした」
巡査が申し訳なさそうに言う。
大丈夫なのか、この調子で？
「まあ、署に行けば証拠品は見れますし大丈夫ですよ。それより、これからどうしますかね？」
「……とりあえず被害者の周辺を洗ってみるしかないですね」
「そうしますか」
それにしても暑くないのだろうか、ボタンが金色に輝く、巡査の制服を見ながら俺はそう思うのだった。
捜査は必ず現場での聞き込みから始まる。刑事は被害者や犯人の気持ちを推理して犯人像を作り上げてから捜査を開始するのである。

初動捜査においての情報収集は最重要であることは言うまでもないだろう。
「すまんなあ、力になれなくて」
「いいえ、ご協力に感謝します」
俺と巡査は二手に別れ、現場周辺を聞き込みのために駆け回っていた。
しかし、分かったことと言えば何も分からないということだ。
結構な人数に聞き込みをしてみたのだが、不審な人物を見たと言う証言も、被害者の少年を見たと言う話も無かった。
「八方塞だな……」
目撃証言が無い。そもそも現場は人通りの少ない路地、目撃者がいるとすればあの猫たちぐらいだろう。
「……こちらでしたか」
血の気の無い巡査の顔がぬっと現れる。
おお、ビックリした。いきなりだと心臓に悪いではないか。ただでさえ不気味なのだから……。
「何か収穫はありましたか？」
「私は警官に向いていないようです」
巡査は暗い面持ちで言う。
「は？」
「……話しかけようと近づくと、人が逃げて行くのです。どうしてでしょうか？」
簡単なことだ。顔が怖い、雰囲気が不気味、生気が無い。
これだけ条件が揃っていれば普通の人間なら関わり合いにはなりたくないと思うだろう。それだけ巡査の持つ空気、オーラというものは異質なのだ。
さらに、その空気と警官の制服という全く性質の異なる物が合わさることによって、なんとも形容のしがたい人物像が出来上がってしまっている。
「どうしてでしょうね……」

俺は曖昧な相槌を打ちながら、うろうろと視線を動かす。
流石に失礼だと思い、本音を言ってしまうのは気が引けたのだ。
「そんなことよりも、蕎麦でも食いに行きましょうよ。腹が減っては戦が出来ぬと言いますし、ここは一つ腹ごしらえでもしながら次の捜査について話でもしましょう。こんな暑い日は冷たいざる蕎麦をつるっとすするのが良い」
「……私はうどんの方が良いです」
そう言って俺たちは蕎麦屋へと向かった。

店内の席はサラリーマンの白いワイシャツによって埋め尽くされていた。
これだけ暑いと喉が渇き、食欲も落ちるわけで、自然と汁気のある蕎麦を求めて人が集まるのだろう。いつもはそこまで繁盛している店ではないが、今日は店員が慌ただしく往来していた。
「……事件について整理しましょう」
先ほどまで茶色いきつねをつまんでいた巡査が、箸を止めて手帳を広げる。
「事件が発覚したのは昨日、被害者の日高武雄君は三日前の恐らく夕方ごろに何者かによって連れ去られたと思われます」
「何で夕方と分かるんです？」
目撃情報は無いはずだ。
「被害者の通っている学習塾の職員の証言です。ちょうど授業が終わったのが午後六時ごろだそうで」
「成る程、では犯行については？」
「……犯人についての情報は無く、分かることと言えば何らかの能力を持っているということでしょう。猫の死骸から察するに物質の水分を奪うものだと思われます」
「でも、不審者の情報も無いし、被害者の姿を見たとも聞かない、ここが一番不自然です。夕方ならまだ人気がある時間帯、誰も見ていないということがありえない」

「……犯人と被害者が顔見知りということはないでしょうか？　それならば少なくとも不審者はいないのですから」
確かにその可能性も否定は出来ない。
「ですが、現場に所持品が残っているというのは被害者が抵抗したことによるものではないでしょうか？　それに、目撃証言が無い理由にはなりません」
「……まだ情報が足りない」
巡査が渋い顔で言う。
確かにこの僅かな情報量で推理するのは難しい。もう少し核心に迫る情報が欲しいものだ。
しかし、聞き込みで得られる情報にも限度がある。現に今日の聞き込みでは大した情報は得ることは出来なかった。
「……子供に聞いてみるのはどうでしょう？」
「子供？」
「ええ、大人とは違う視点の子供は思わぬ情報を持っているものです。それに被害者も子供、子供同士の何気ない会話にも事件に関係する事があるかもしれません」
「ですが巡査、子供に聞き込みですか？」
「……」
大人ですら近づかないのに、果たして子供たちに満足な聞き込みが出来るのだろうか？
「……どうにかなりませんか？」
「仕方ない、あいつらを呼ぶしかありませんね」
子供のことは若いもんに任せるしかない。俺たちみたいなオッサンではなく。

◆

第一声はすみれの容赦無い一言だった。
「うわっ、怖っ、何か死んだ人みたい」

すみれが巡査を指差す。
この子は悪気は無いんです。ただちょっと素直すぎるだけなんです。
「すみれ、影山さんに失礼じゃないか。こういうときは『まるで死体のように落ち着いた雰囲気をお持ちですね』ってオブラートに包んで言うんだぜ」
お前も十分失礼だ。バカタレ！
「すいません巡査、この無礼者どもには後できつく言い聞かせておきますから……」
「……いえ、結構です。私が怖がられる理由も分かりました。……死体ですか、はは」
巡査が自虐的な笑みを浮かべる。
「それよりも早く調査を始めましょうよ」
ハルが呆れ顔で言う。
「そうだな、時は金なりだ」
こんなどうでもいいことに時間を浪費するわけにはいかない。
「で、まずどこから聞き込みをするんですか？」
「駄菓子屋」
「は？」
ハルが口をぽかんと開ける。
「おいおい、何だその表情は？　俺はいたって真面目、脳みそも正常稼動中だぜ」
「でも、駄菓子屋は無いでしょう。左近さんがサボりたいだけじゃないですか」
「違うわ、大真面目だ。いいか、駄菓子屋といえば何がある？　すみれ、言ってみろ」
「お菓子〜」
「その通り、子供の大好きな駄菓子がたっぷりだ。それだけじゃない、メンコ、ベーゴマ、ビーダマ、おはじき、言い出したらきりがないほどの娯楽が存在する。つまり、ヨーロッパで言うカフェ、古

代ローマの大浴場に等しい、子供の社交場だ」
「要するに手っ取り早く情報収集ができるってことですか？」
「そういうこと。じゃあ、早速行きましょうや」
俺たちは駄菓子屋へと向かった。

ベーゴマ、それは決闘。
円形の遊戯台で行われる、鉄のコマのぶつかり合い、それはまさにコロッセオで命を削り合う剣闘士の戦いだ。
勝者は敗者のコマを奪い、敗者はただ敗北を噛みしめるのみ。形は違えど、勝者が全てという決闘の精神は、遠いローマの地から大正の日本へとしっかりと受け継がれている。
「あー、また負けたぁ。兄ちゃん強すぎ、手加減してよ」
「悪いな坊主、勝負の世界に手加減は無いんだ」
俺は地面のコマを拾い上げ、ポケットにしまう。
これで五連勝、相手が悪かったな少年、年季が違うのだ。十何年とベーゴマをやってきた俺が、ベーゴマの世界に踏み入れたばかりの新人に負けるわけなかろう。
「くっそー」
少年は悔しそうに唇を噛みしめる。
少年よ、その悔しさが人生の糧となる。今日の敗北は無駄ではないのだ。
「何してるんです」
ハルが尋ねる。
「ベーゴマ、お前もやる？」
「いいです」
「じゃあ何？　手持ちが無くなったの？　仕方ねえなこれで遊んどけ」
ハルに小銭を握らせる。
「聞き込みはどうしたんですか」
「ハル、物事には順序がある。お前はいきなりベーゴマを楽しんで

いるところに割り込まれて、『知っていることを話せ』と言われて不愉快にはならないのか？　それよりもまず、こうやって子供たちと親睦を深めてから聞き込みをした方がお互い得じゃないか」
「もっともらしいこと言ってないでさっさと仕事してください」
「えー、俺だけ？」
すみれと八神はくじに夢中になり、巡査はラムネ瓶を傾けていた。俺だけ言われるのは不公平だ。
「してください」
「はい」
ハルの有無を言わせない迫力に押されて、俺は仕方なく聞き込みを始めることにした。
「少年、日高武雄という名前を知っているかな？」
その名前を口に出した瞬間、その場にいた子供たちの目の色が変わった。
「武雄！　武雄の事知ってるの！？」
少年が尋ねる。
「俺たちは武雄君の行方を捜しているんだ。何か事件に関係あることを知らないか？」
「……分からない。あの日、武雄は習い事があるからって一緒じゃなかったから」
少年の表情は暗い。
「そうか、ありがとうな」
「ねえ、俺たちに手伝える事は無い？　武雄を誘拐した犯人を懲らしめてやりたいんだ」
少年が言う。その言葉に周りからも賛同の声が上がる。
「悪い事は言わないから大人しくしときな。大丈夫、俺たちが絶対に見つけてやるからよ」
そうたしなめると、少年たちは渋々引き下がった。それでも納得いかないという表情だった。
「本当に？」

「ああ、任せとけ」
そう言うと少年たちは笑みを浮かべてこう言った。
「約束だからな！　あと今度はベーゴマ負けないからな。もう一回勝負だ！」
「返り討ちにしてやる小僧」
これからはいつでも再戦が出来るようにベーゴマを持ち歩く必要があるな。
俺はポケットのコマをまさぐりながら思った。

髭

あれから三日、特にそれといった情報も得ることも出来ず、早くも捜査は行き詰っていた。
「無理、全然見つからない。と言うか、何万って人がひしめくこの帝都で不審者一人いたところで不審じゃないわ。そんなのまさしく『お前は今まで食べたパンの数を覚えているのか』ってくらい答えようが無いね」
何故俺が犯人探しをしなければならないのだ。警察が捜査すべきなのだ。そうだ、そうに違いない。
俺はやるせの無い苛立ちを覚えながら、戦利品であるベーゴマをやすりで削っていた。
「少尉、捜査の調子はどうだ？」
少将が丸めた新聞紙で俺の頭を小突く。
「順調ならこんなところでしかめっ面してコマいじってませんよ」
「それはそうだな……見てみろ、今回の事件が新聞に載ってるぞ」
俺は少将から新聞を受け取り、灰色の活字を目で追う。
「『男児誘拐事件、犯人の手がかりは皆無。現場には謎の猫のミイラ二体が』、捜査情報だだ漏れじゃないですか」
「漏れるほどの情報も集まってないと思ったがな」
少将が皮肉交じりに言う。
「意地悪なことは言わないで下さい。これでも努力してるんですから」
「悪い悪い、それにしてもこれだけ事件が取り上げられているというのに、犯人は何の動きも見せないな。営利目的の誘拐なら身代金を要求したりするものだろう」
もしかしたら身代金が目的ではないのかもしれない。ふと俺は思った。
「犯人に関する情報も無く、犯人が行動を起こす素振りも無い、こ

れじゃ俺たちが出来ることは何も無いですよ」
「……確かにな」
部屋に静寂が訪れる。その中でコマを削るやすりの音だけが空しく響いていた。
その静寂を破ったのはけたたましい電話のベルだった。
俺は受話器を取る。相手は影山巡査だった。受話器越しに暗い雰囲気の声が聞こえてきた。
「あー、おはようございます影山さん、捜査の方は相変わらずですね。何か良い情報でもあったんですか？　わざわざ電話なんて」
『これは事件に関係があるかどうかは微妙なんですが、ちょっと気になる情報を聞きまして』
「と言うと？」
『……事件当日に、精神病院に入院中の人物が病院を抜け出したという通報がありましてね。何の確証も無いのですが、とりあえず調査してみようと思ったのです。詳しい事は現場にてお話したいのですがよろしいですか？』
「ええ、構いませんよ、では」
受話器を置くと、俺は期待に包まれながら巡査の元へと向かった。
事件とは何の関係も無いところから思わぬ手がかりが見つかるのだ。

◆

白を基調とした落ち着いた雰囲気の医局、俺たち二人とは別に、そこには部屋の壁と同じような色の白衣を着た初老の医師がいた。
事件当日に姿をくらました男、乾義明の主治医である。
「ちょうど一週間ほど前のことでした。あの日は暑かったのでよく覚えています。私はいつものように患者の様子を見てまわっていました。それで彼の部屋を訪れたのですが、私がそこで目にしたのは空になったベットと、しおれた花、それと彼がいつも読んでいる学

術書だけでしたよ。まさにもぬけの殻でした」
医師は言った。
「それで、何か変わったことはありませんでしたか？　どんな些細な事でも良いですので」
「変わったことですか、うーん」医師は首を捻りながら唸り、「ああ、そう言えば包帯が無くなっていたんですよ。それも相当な数、一箱丸ごとぐらいは無くなったんじゃないでしょうかね。一体誰が何のためにしたのかは分かりませんが、いい迷惑ですよ」と苦い笑いを浮かべながら言った。
「包帯ですか、その他には何かありませんでしたか？」
「そうですね……これは事件の日よりも一、二日前なんですが、看護婦が話しているのを小耳に挟みまして、何でも髭をたくわえた外国人が院内を徘徊していたそうです」
「髭の外国人？」

◇

俺たちは乾義明の自宅を訪れていた。
お世辞にも立派とは言えない、古びた外装のあばら家は、長らく家の主が留守にしていたせいなのか、埃が積もり、くもの巣が蔓延っていた。
「これはひどい」
思わず言葉が口に出てしまった。
「戸籍上はここが乾の本籍のようですが、どうやら入院のせいで手入れすらされていないようですね」
巡査が手帳を広げながら言う。
俺は玄関の引き戸を開ける。鍵はかかっていなかったが、戸の滑りが悪くて開けるのにてこずった。
中は想像通り埃まみれになっており、辺りには学術書と見られる多くの書物が散乱していた。一歩踏み入れると、その足元をねずみ

が鳴き声を上げながら駆けていった。
だがそれよりも目に付いたのは、奥に陳列されている物だ。
「……剥製ですかね？」
巡査が呟く。
そこには犬、猫、猿といった様々な剥製らしき物体があった。むしろ剥製というよりは干物のようであった。
部屋いっぱいに積み上げられていたために正確な数は把握できなかったが、二、三十個、探せばまだまだ出てきそうだ。
「いや違う」
俺はその物体に見覚えがあった。一週間前に巡査が持ってきた物、そして俺が捜査に関わる要因になった物だ。
「ミイラですよ。現場にあった物とそっくりじゃないですか」
毛の種類こそ違うが、死骸の状態から見ても間違いないだろう。さらに不思議な事に猫のミイラだけは、他のミイラと比べて比較的新しかった。これだけ寂れた家に放置されていたにもかかわらず、埃もほとんどかぶっていなかったのだ。
「……これは」
巡査が目を見開く。
「もしかすると答えかもしれませんよ」
俺の頭には一つの推理があった。それは乾義明が犯人であるというものだ。
確か前情報によると、犯人は何らかの能力を持っている。恐らく物質を乾燥させるものだ。これを使えば猫の一匹や二匹ぐらいはミイラにできるだろう。事件当日に病院から姿を消したのもきな臭い。
推論の域を出ないが可能性は十分だ。むしろ今まで何の情報も無かった分、最も怪しいだろう。
「……しかしまだ不明な点も多いです。動機は何なのか、被害者の姿が何故目撃されていないのか、それに乾義明はどこにいるのか。――状況証拠しかない今、乾は怪しいけれども、本当に犯人なのかと問われれば、首を縦に振る事は出来ないでしょう。そして何より

も重要なのが被害者の安否です。事件発生から約一週間経つが何の音沙汰も無い。身代金目的の営利誘拐ならば少なくとも殺したりはしないでしょうが、犯人からは何の要求も無く、身代金目的とは考えにくい」

巡査の言うとおりである。何にせよ、乾から話を聞く必要があるのだ。重要参考人としてなのか、誘拐事件の犯人としてなのかは定かではないが。

「さて、そろそろ出ましょうか。こんな所にいては鼻水が止ま――誰だ？」

一瞬であったが、人の気配を感じた。乾かもしれない。

「……どうしました？」

巡査がいぶかしげに尋ねる。

「いえ、さっき誰かがこちらを窺っているような気がしたのですが、気のせいでしょう」

家の外を見渡してみたが、いるのは猫くらいであった。

「乾でしょうか？」

「さあ、姿を確認する事は出来ませんでしたから……はぇっくしぇい！」

何てことだ。埃まみれの部屋にいたものだから鼻炎を起こしてしまった。

「大丈夫ですか？」

「大丈ぶぇっ！」

俺は鼻下を擦りながら『大丈夫ではない』と目で巡査に伝える。

「……こういうときはハッカ飴を舐めると良いですよ」

「そうしましょう」

とにかくこの鼻づまりをどうにかしなければ。

◆

透き通るミントの香りが鼻中を突き抜ける。先ほどまでの鼻腔の

不快感が嘘のように吹き飛んだ。
「ああ、楽になった」
事件の謎もこれくらいすっきりしてくれたら嬉しいのだが。
「……私はこのハッカ飴が大好物でしてね」
そう言って巡査が満足げな表情で飴を頬張る。
一度に三個くらい口に入れていたような気がしたが、大丈夫なのだろうか。主に鼻が。
「……ほれにひても、あおこおもはひはほこにひっはんへひょうね？」
「巡査、何言ってるか分かりません」
一気に舐めすぎだろうに。
「ふいはふぇん……すいません、思わず我を忘れてしまいました」
ハッカ飴で我を失う警察官もそうはいないだろう。
「それで、さっき何と？」
「……いえ、些細な事なのですが、この前いた子供たちはどこに行ったのかと思いましてね。見たところどこにもいないようですが」
「確かに」
俺たちが今腰掛けている椅子は駄菓子屋の目の前にある。普段ならこの周りで子供たちが思い思いの遊びに興じていても不思議ではない。しかし、今ここにいるのは俺と巡査の二人だけである。
「……さっきまでいたようですしね」
巡査が地面に落ちていた一枚のメンコを拾い上げる。
辺りにはメンコやビーダマなどが散らばっており、先ほどまでここで子供たちが遊んでいたのは間違いないだろう。
「おばあちゃーん、さっきまでここに坊主たちいたでしょ？　どこ行ったの」
店の奥で猫を抱いている店主に尋ねる。
「あー？　さっきよく分からないけど外人さんが来てねぇ、みんな付いていったよ。目の色変えてねぇー」
「外人？」

嫌な予感がする。
「ああー、顎にこーんな立派な髭生やした外人さんがねぇ」
「髭の外国人、……まさか」
あの時の医師の言葉がよみがえる。
――髭をたくわえた外国人が院内を徘徊していたそうです。

イカレタ命

「出ろ、出ろ、早く出ろ」
まだそう遠くへは行っていないはずだ。急げば間に合う。早くしろ。
無機質な呼び出し音が俺の焦る心をいらつかせる。
「一体どこへ電話を？」
「少将にですよ」
ただ闇雲に探しても時間の浪費である。ここは能力を使って捜索した方が早い。
『はい』
「もしもし？　片桐です。急いですみれにつないでください。思念体を飛ばしてもらって俺たちのいる場所周辺を捜索しろと」
『……理由は後で聞こう』
こういう時、少将は物分りが良くて助かる。

新橋より程近いここ芝公園、緑に囲まれた敷地にはこじんまりとした土産物屋や露店が並んでおり、賑わいを見せていた。
「次はどこだ？」
『んと、真っ直ぐ行って、門のところ』
俺の呼びかけに、すみれの思念体から声が返ってくる。直接脳に語りかけるような返事だ。
「……テレパシーですか、すごいものですね超能力とは」
巡査が目を丸くする。
「それだけじゃないですよ。あいつの能力は自分の視覚、聴覚、嗅覚といった感覚を思念体と共有する事で、離れた場所からでも探索が可能です。もちろん距離が大きくなるほど精度は落ちますけどね」
それでも十分すぎるほどの情報（ナビゲート）だ。これが無ければ当ても無く彷徨っていたことだろう。

『お寺に入ったよ』
「寺？　増上寺か」
この芝公園で寺と言ったら芝増上寺しかない。
「仏さんがいる場所で何やらかすつもりだよッ！」

――増上寺本堂――

くぐると三つの煩悩から解脱できると言われる三解脱門をくぐり抜け、俺たちは石畳が広がる本堂前へと辿り着いた。
そこには坊さんや参拝客とは別に、ある男の姿があった。
くしゃくしゃに伸びた鬚と、それとは対照的に真っ直ぐに伸びた黒髪、幾重ものしわが折り重なる険しい顔。これだけでも十分に目立つのだが、境内で西洋風の僧衣を身にまとっていたので余計に怪しい人物に見えた。
間違いない、髭の外人はこいつのことだ。
「ワタシに何か御用ですカ？　ボーイとそこのポリス」
声をかけようとしたときだった。男は俺が口を開くよりも先にこちらに問いかけてきた。
その口調は顔に似合わず、子供に話しかけるような穏やかな喋り方だった。
「誰がボーイだ。こんなナリだから給仕みたいってか？」
「OH、コレが本場大阪のジャパニーズツッコミというやつですネ。なかなかお上手ですヨ」
男はからかうように笑う。
言いたい事は山のようにあったが、このままでは埒が明かないので本題に入ることにした。
「あんた、さっきまで子供を連れてなかったか？」
「ンー、ワタシには残念ながら子供はいないんですヨ。愛人（ラマン）はメニーだったんですけどネ。ハハハハ、そんな怖い顔しないで下さイ。冗談ですヨ、冗談、イッツァジョーク」

『らまんってどういう意味？』
「お前はまだ知らなくて良い」
すみれ、ちょっと黙っててくれ。こっちは今重要な事を話しているんだ。
「あんたらしき人物が子供を連れて行ったって話を聞いてね。それだけじゃない、前に病院にも出没したって証言もある。ちょっと話を聞かせてもらおうじゃないか」
その言葉を聞くと、男は先ほどまでのふざけた雰囲気から一転し、真面目な顔でこちらを見据えてきた。
「ソーリー、ちゃんと真面目に答えましょウ。――簡単なことでス、ちょっとの間、口が訊けないようにしただけですヨ」
「何？」
「ちょっと眠ってもらっただけですヨ。危害は加えてませン。今頃はあの駄菓子屋の近くにあった空き地辺りで寝ている事でしょウ」
この男の言っていることがどこまで本当なのかは分からない。
だが、一般人とは明らかに違う空気をまとっている。まるでシマウマの群れに一匹紛れ込んだハイエナのような場違いな雰囲気、そして隠そうとしても滲み出てくる狡猾な臭い。
「何のためだ？」
「ユー達に会わせたい男がいるんですヨ。――イヌイ、出てきてくださイ」
髭の男が合図をすると、どこからともなく男が現れた。
乾と呼ばれた男は立て襟の洋シャツに袷と袴姿で、くたびれたハンチング帽をかぶっていた。
「……乾義明だな」
「はい、そうです。私が乾義明です」
乾はそう言うと、行儀良く帽子を取って会釈をする。その様子は精神病院を抜け出してきた人間とは思えなかった。
一体彼のどこに異常があるのか俺には分からない。
「刑事さんは私を逮捕しに来たのでしょう？」

乾が巡査に問いかける。
「……何故そう思うのですか？」
「それは――――私が殺したからですよォッ！」
男が叫んだ瞬間、俺たちの間を黒い影がよぎる。
「何……だと？」
その光景に俺は思わず言葉を失った。
目の前に現れたのは一人の少年、いや少年と言うのは語弊がある。
樹木の皮のように干からびた皮膚に、骨と皮のみの体、眼球は抜け落ち、枯れ井戸のようにくぼんでいた。その姿はまさにミイラと言うしかないだろう。
「見てください。美しいでしょう？　この死ぬ間際のもがき苦しむ表情なんてたまりませんね。あなたにも聞かせたかったですよ。絶命する前の喘ぎ声を。今でもあの声は鼓膜に残っています」
乾は狂った笑みを浮かべながら自慢げに語る。
前言撤回だ。こいつはイカれている。

◆

昼下がりの境内に響くのは、拳が空を切る音と浅く早い呼吸音、そして乾の満足げな笑い声。
「ははは、どうです？　目の前で屍が動き、そして襲い掛かってくる、こんな奇怪な事は無いでしょう？」
乾は笑みを浮かべながら掌を繰り出す。
俺は顎に向かってくる掌底を半身になっていなし、突き出された腕を掴み、その勢いを殺さずに乾を投げる。
そのまま地面に転がった乾に追い討ちをかけようと地を踏みしめる。
しかし、横からミイラの拳が飛んでくる。
その拳を体を捻じって避ける。しかし、その拍子に足を踏み外してバランスを崩してしまった。

その隙を見逃すはずも無く、容赦の無い拳が俺の眉間に迫る。
「……少尉！」
巡査がそのミイラの追い討ちを受け止める。
死んでいるというのに生きた拳を放つその姿は、生と死という相反する矛盾を持ち合わせており、滑稽という思いと共に、死してなお操られるという悲劇への同情の念すら思わせた。
「まだだァ！」
起き上がった乾が巡査に向かって殴りかかる。
俺は身を屈め、迫ってくる乾の体に肩からぶつかる。鈍い衝撃が体に広がり、それと同時に乾の体は再び石畳に転がる。
「うあぁぁっ！」
その時、背後から巡査の悲鳴が響く。今までの巡査からは想像もできないほどの叫び声だった。
振り向くと苦悶に満ちた表情であぶら汗を浮かべながら、巡査が左腕を押さえていた。
その左腕は通常とは逆方向に捻じれており、骨が折れて筋が断裂している事は容易に想像できた。
その無防備な状態の巡査に、容赦無く蹴りが襲う。
一体その小さな肉体のどこからそんな力が出るのだろうと思うほどに威力のこもった蹴りによって、巡査の体が境内の端まで吹っ飛ぶ。
巡査は力なくうなだれていた。
「ＯＨ、そこのポリスはもう駄目ですネ。これでユーとイヌイたちの二対一、大人しくギブアップしたらどうですカ？」
横から髭の男が言う。
「うるせえ、テメエの汚え髭引っこ抜くぞ！」
状況は芳しくない。せめて乾かミイラのどちらかを動けなくしないと、こっちが数で押されてしまう。
「ＮＯ、汚くありません。ちゃんと手入れしてまス」
そういうことじゃねえんだよ。

「随分余裕じゃないですか？」
その声と共に乾の拳が迫る。
俺はその攻撃をバックステップでかわし、乾たちと距離をとる。
「どうしました？　怖気づいたんですか？」
「ああ、怖いさ。ションベンちびりそうだ」
考えろ、どうして死んでいるはずのミイラが動くんだ。何かからくりがあるはずだ。
「正直ですね。その正直さは嫌いじゃないですよ」
「お褒めにお預かり光栄だな。だけど今俺が話したいのはお前じゃなくて、後ろの髭なんだよ！」
乾の能力は触れた物質の水分を奪う、これは間違いないだろう。つまり動くミイラの犯人は髭野郎の仕業に違いない。
「何ですカ？」
「お前、どうやってこのミイラを動かしているんだ？」
「簡単なことでス。私の祈りのフォースが伝わってパワフルなアクションができるんですよ」
祈りとか言っているが、つまりはあいつの超能力で動かしているに違いない。と言うことはあの髭をぶっ飛ばせばミイラの動きも止まるというわけだ。
「じゃあお前の祈りを中断すればいいんだな」
「そんな簡単にいくと思いますか？」
乾が立ち塞がる。
こいつ一人の実力は俺よりも下だ。唯一厄介なのが、手のひらで触れられた部分の水分が無くなるというものだが、触れられなければ良いのだ。
問題は相手が乾一人ではないということだ。
髭男の操るミイラは力も速さも常人のものではない。一対一なら何とかなるが、乾と同時に相手をするには少しばかりきつい。
だが、そのミイラを無効化するには髭男を倒さなければならず、髭男を倒すにはこいつらを倒さなければならない。

巡査が健在ならばまだどうにかなっただろうが、腕を折られた上に気を失っている。この状態では援護は期待できないだろう。
ハルや八神たちが駆けつけるのを待つという手もあるが、あいつらは形勢が不利と分かったらすぐにでも逃げる事が出来るだろう。みすみす犯人を逃してしまうのは勿体無い。
つまりはこの状況を俺一人で打破しなければならないというわけだ。
一瞬で良いから何か動きを止めることが出来る物は無いだろうか。そう思って辺りを見渡したが利用できそうな物は何も無い。ポケットを探ってみても、あるのはベーゴマくらいだ。
ベーゴマか……。
「畜生、やってられねえぜ」
一か八かだ。当たって砕けろ。

イカレタ命（後書き）

超能力を生かした戦闘がうまく書けない。
血を操るからどうにかして出血させないといけない。
でもめんどくさいから徒手空拳の戦いだけを書く。

鉛弾

汗がにじんだ手でベーゴマを握り締めながら、俺は真っ直ぐに髭の男目がけてひた走る。
緊張、不安、戸惑い、そんな思いを抱きながらも、俺の口元は無意識のうちに笑みを浮かべていた。
そこにあるのは戦いという愚かな行為に喜びを感じる己の哀れな利己心だ。
戦闘という己の身を削るマゾヒズムな行為によって得られる、相手を捻じ伏せるというサディスティックな快感が堪らなく心地よいのだ。
「うははははあぁッ！」
意味も無く笑い声を上げてみる。
お陰で幾分かの不安な気持ちが晴れた気がした。
「無意味ですよ。二対一であなたに勝ち目はありません」
乾と髭男の操るミイラが俺の目の前に立ちふさがる。
「なめるなよっ！」
俺は小さく跳躍し、横手投げでベーゴマを放り投げる。気分はさながら早稲田か慶応の名内野手だ。
放たれた鉄の弾は乾の顔をかすめ、一直線で髭男の顔面に飛んでいく。投石、最も原始的で単純な攻撃である。
「ＯＨ！　危なイ」
髭男はコマが当たる寸前で体を仰け反らして回避する。
その僅かな隙を俺は見逃さなかった。
髭男の意識が一瞬コマに向けられた時、操っていたミイラの動きにも隙が出来た。
俺は迷わずに右足を振りぬき、ミイラの横腹に蹴りを入れる。
ミイラのちり紙のような軽さの体はあっけなく吹っ飛んでいった。
これで一対一。俺は標的を乾に変更し、新たな獲物に向けて右足

を繰り出す。
「くそッ！」
しかし、俺の振り上げた右足を乾は両手で受け止める。
すると、乾の触れている俺の革靴が網の上の魚のように音を立てながら干からびていく。
「この靴高かったんだからなッ！」
自慢の靴を駄目にされた怒りを込めて、左の拳で乾のこめかみを狙い打つ。
鈍い手ごたえと共に乾の体は地に伏せる。
「ヨクもやりましたネ！」
ミイラが横から蹴りを入れてくる。
俺はそれを難なく避けると、ミイラの首根っこを掴んでそのまま地面にねじ伏せる。
「次はお前の番だッ！」
俺は髭男の方に向き直る。
「ユーはとてもストロングですネ。さすが、帝國軍人でス」
「やけに余裕たっぷりじゃないか」
狩る者と狩られる者、その構図ははっきりしているにもかかわらず、目の前の髭面はやけに落ち着き払っていた。
「そんな簡単にギブアップすると思っていますカ？　ワタシにはまだ手段が残っているのでス」
男は不敵な笑みを浮かべる。一体何を企んでいるというのだろうか。
「……それではさらバ！　また会いましょウ」
男は走り出した。
「逃げるのかよッ」
「逃げるが勝ちデース。ワタシのスプリントは簡単には追いつけませんヨ」
男はまるで野うさぎのように駆ける。
だが俺も黙って指をくわえているはずが無い。すぐさま男の背中

を追う。
しかし、乾に靴を壊されたせいか思うように走れず、あっという間に男の姿を見失ってしまった。
また会いましょう、その言葉にどんな意味が込められていたのだろうか。
乱れた呼吸の音だけが辺りに響いていた。

◆

俺は影山巡査の見舞いのために新橋署を訪れていた。
「具合はどうです？」
いつも具合の悪そうな顔をしている巡査だが、今日はまずまずの顔色だった。
左腕に巻かれた痛々しい包帯が怪我のひどさを物語っている。
「……ただの骨折で済んでよかったですよ。それに右手は動くので書類仕事は出来ますしね」
巡査は右手をひらひらと振って見せた。
俺なら仮病を使ってでも数日は仕事を休みたくなるものだ。怪我をしながらも仕事に励むとは何と真面目な事だろう。その労働意欲は賞賛に値する。
「乾は何か喋ったのですか？」
「言ってる事が支離滅裂ですよ。陸軍がどうとか、日本を支配するとか、洗脳でもされたんでしょうか？　髭の男との関係も犯行の動機も分かりません。一つだけ分かったのが、乾は能力者ではなかったということです」
「どういうことですか？」
「……もともと乾は何の能力も持っていなかったそうで、能力を手に入れたのは髭男と会ってかららしいですよ。もっとも、どのようにして能力を手に入れたかは覚えてないそうですけど」
超能力、その発生には様々な例がある。先天的に能力を持つ者、

何らかの事故にあった後に能力を手に入れた者、過去には頭部穿孔（トレパネーション）によって超能力を手にしたという話までである。
「それじゃあまるで髭男が能力を授けたみたいじゃないですか」
人が人に能力を与える。それはまるで神が人に叡智を授けるような行為であって、人が入るような領域では無い、そんな後ろめたさすら感じさせた。
「……ははは、そんな力があれば能力者が腐るほど集まってしまいますね。超能力者だけで軍隊でも作れそうじゃないですか」
巡査が笑う。相変わらずこの人の笑いは不気味である。
「そんなことになったら大変ですよ。超能力なんてのは使い方によっては人殺しの道具と同じようなものです。超能力者は人間である前に凶器なんですからね」
超能力を武器とするならば、超能力者は武装した兵隊と同じなのだ。しかもその銃は、引き金を引くと鉛の弾が飛び出るというような単純な代物ではなく、鬼が出てくるかもしれないし、蛇が出てくるかもしれない。どんな結果が待ち構えているか分からないのだ。
「そんなのを相手に腕一本というのは幸運だったと言うべきでしょうかね」
「かもしれませんね。少なくとも前の俺のように体中に包帯を巻かれていないだけマシじゃないですかね？　本当ミイラみたいでしたよ」
「……そう言えばミイラで思い出したのですが、被害者のミイラ化した遺体、ミイラ化以外に全く損傷が無かったんですよ。私たちとやり合ったはずなのにおかしいですね」
「それは変な話ですね」
あの時俺は確かに攻撃を当てたはずだ。手ごたえも十分にあった。それなのに遺体に損傷が無いというのはどういうことだろうか。
「これもあの髭男の超能力なんでしょうかね」
あのふざけた髭面を思い出す。
あの男ならばこの芸当をやってのけても不思議ではないはずだ。

「……また会いましょう、か」
男の目的も正体も全てが謎に包まれている。
しかし、最後の言葉と不敵な笑みはこれから起きるであろう騒乱を暗示しているかのようであった。

渇望

久しぶりのカーキ色に身を包みながら、私は一人ため息をつく。能力者部隊計画、この限られた人間しか知りえない情報をこれから探していかなければならない。一介の大尉風情が陸軍中将の腹案を暴くというのだ。

そう考えるだけで両肩に漬物石でも載せられたような重い気分になった。

「どうしてそうも辛気臭い顔をしているんだね　筧大尉」

いかにも軍人というような低く重い声で、柴田少佐が話しかけてきた。

制服越しでも分かるほどに隆起した筋肉の鎧と、その体に見合うごつごつとした表情は昔とほとんど変わっておらず、強いて変わったところを上げるとしたら胸元の星の数ぐらいだろうか。

今は秋水の張本少将の下にいると聞いている。

「柴田少佐殿、お久しぶりです」

私が大尉の職を辞した時、彼も大尉であった。それが今では少佐の階級章を胸に付けているのだ。時が経つのは早いものである。

「久しぶりだな大尉、復職したと聞いたぞ。やっぱりお前は制服が似合わないな」

そう言って少佐は笑みを浮かべる。とは言うものの、鎧武者のように無骨なその顔は僅かに口元を緩ませているようにしか見えなかった。

「私はこの制服が大嫌いなんですよ。海軍を志願していればよかったと後悔しています」

「そうか？　私は割と好きだがな」

柴田少佐は近くにあった椅子に腰掛けると、咳払いを一つして言った。

「筧大尉、鴉に興味はあるか」

「鴉ですか……」
予期せぬ少佐の言葉に、思わず声が低くなった。
いきなり鴉の話をする人間はいない。何を意味しているのかはすぐに理解できた。
「最近は珍しい鴉もいるみたいでな、この前など長い髭を生やした鴉を見かけた。今まで見たことはなかったから恐らく外国のものだろうと思う」
「はあ……」
少佐はどこまで今回の件に関わっているのだろうか。そう考えるとうかつな発言ははばかられてしまい、適当な相槌を打つしかなかった。
「大丈夫だ。今回の件は村上さんからもうかがっている。私になら話しても構わない」
少佐がそっと耳打ちをした。
「……今日の仕事が終わったらいつもの場所に飲みに行きますか」
「ああ、いつもの場所で」

◆

その夜、私は柴田とともに都内の飲み屋を訪れていた。以前によく訪れていた馴染みの店だ。
「それでは、筧大尉の復職を祝って乾杯」
「ありがとうございます」
二人しかいない静かな座敷で杯を交わす。確か昔もここで同じように酒を酌み交わしたな、と私は昔をしみじみと懐かしむ。
「そもそも何でこの件に？　少佐は秋水所属ではなかったのですか」
私はふと思った疑問をぶつけてみる。
「ん？　私は昔も今も秋水の一員だ」
柴田がつまみの刺身を箸でつつきながら言う。
「烏丸中将の能力者部隊計画なんだがな、議会や軍首脳からは非現

実的と不評だ。超能力という非科学的な謎の力、実用化には相当な時間とコストがかかる。それに見合う効果は期待できないとの判断から中将の案は却下されたわけだが、中将はそれが不服なようで秘密裏に資財を投じて私兵団を作っている。ここまでは話に聞いているだろう？」

「ええ」

「問題はここからだ。――何故能力者部隊を設立するのか？　国や軍のためを思ってならばそう問題ではないが、もしその部隊をよからぬことに使おうと画策していたらどうする？　一人でも脅威の超能力者たちが群れをなす、これほど恐ろしい事はないだろう。そんな危なっかしい部隊を一人の人間が掌握してしまったら、己がままに動かす事ができたら、しかも陸軍中将という立場にある人間だったらどうする？　下手すればクーデターだって起こせる」

「クーデター……」

我々軍人の中で最もタブーとされる行為、人々の自由や意見を武力で封殺する愚行だ。

「今回の件には村上さんだけでなく張本少将も一枚噛んでいてな、軍でそれなりの立場にあり、なおかつ秋水の一員の私に白羽の矢が立ったわけだ。復職したばかりの一大尉が探るには少々無理のある内容だからな」

「それほどに村上さんたちは烏丸中将を危険視しているのですか」

「そういうことだろう。何でも中将は自分に共鳴する若手将校たちを自宅に招いて連日のように酒を振舞っているそうだ。不景気や軍縮のせいで若手将校の待遇も悪くなっている今、味方を増やすために囲い込みをしているといったところかな」

大戦が終結すると、過剰な設備投資と在庫の滞留が原因となって反動不況が発生して景気が悪化した。

更に戦時中停止していた金輸出禁止の解除の時期を逸したために、日本銀行に大量の金が滞留、金本位制による通貨調整の機能を失い、政府、日銀ともに景気対策が後手後手に回った。

それに加えて関東大震災による京浜工業地帯の壊滅と、震災手形とその不良債権化の問題も発生したお陰で景気回復の見通しは全く立っていない。
当然その不景気は軍事費削減へとつながり、結果として将校たちの財布にも影響しているわけだ。
「今までより俸禄が少なくなれば、当然快くは思わないでしょうね」
「だろうな」
そう言って柴田は三杯目の酒をあおった。
「さて、次に話題に移るとしようか。――髭の鴉の事だ」
「変な鴉ですねえ」
その存在自体も変だし、何よりも全然隠語になってないところが滑稽だ。そう思ったが口に出すのは止した。
「五十嵐少佐という烏丸中将の腰巾着がいるのは知っているか？」
「何年も軍を離れていた私が軍内部の派閥なんて知る由もないでしょう」
こちとら友人の昇進すら関知していなかったのだから。
「彼は烏丸が最も信頼する人物の一人だ。生まれも育ちも同じ土佐ということもあって中将から随分と可愛がられているらしい。そして何よりも重要なのが中将の私兵団を率いる人物だということだ」
と言うことは五十嵐少佐も超能力者なのか。案外身近に能力者がいるものだな。
「それと髭の鴉がどう関係してくるのですか？」
「確か半月ほど前だったかな。ちょうどお前が能力を使って小遣い稼ぎをしていた頃だ」
「小遣いと言うには少しばかり額が大きかったような気がしますがね」
二週間前、ちょうどダム計画関係者の事件が起きた頃だ。あの事件は依頼の内容が奇怪だったためによく覚えている。
何しろ男を現場に飛ばすだけで、暗殺の成否は問わないというものだ。普通なら成功が前提なのに成否は問わない、あの依頼の本当

の目的は何だったのだろうと今でも疑問の渦が渦巻いている。
「外人で髭面となると目立つものでな、その頃からたびたび五十嵐と男が接触していた事が分かっている。何でも修道服を着た祈祷僧風のなりをしていたそうだ」
やれやれ、今度は宗教にでも手を出すつもりなのか。
「目的は超能力がらみでしょうね。帝国軍人が得体の知れない宗教をありがたく信仰している姿は少し想像が出来ませんし」
「そう考えると鍵となる人物はその男となるな。五十嵐との接触は恐らく超能力部隊計画についてだろう」
「となると私たちのすべきことは決まりましたね」
「ああ」
私と柴田は顔を見合わせて笑う。
こんなに簡単に手がかりが見つかるとは、案外今回の依頼はぼろいかもしれないな。

◇

それから一週間後、髭の男がとある誘拐事件に関わっていたという報告を柴田から受けた。
事件との関係や髭男の目的の目的も気になったが、それよりもある男の名前に私の興味は魅かれた。
片桐左近、その名前を聞いただけであの夜の事を思い出す。
あの血に染まった拳と狂気染みた戦いぶりを目の当たりにして忘れろというほうが無理があるだろう。それほどにあの夜は衝撃的だった。
今の私には対する感情は純粋な興味と好奇心しかない。新しい玩具を与えられた子供、もしくは新たな実験材料を前に舌なめずりする科学者と同じものだ。
今回の依頼で私は報酬や計画を暴くという当初の目的よりも、目の前に現れた新しい存在を追いかけることしか頭に無い。

村上さんが聞いたら良い思いはしないだろうが、それほどに私はあの男に熱を上げている。生娘が恋に恋するかのようにだ。

彼は私の刺激を渇望する心を満たしてくれるのか、それとも初恋のように甘くほろ苦い終わりを示すのか、それはまだ分からない。

だがそれでも私は目の前の人参に噛り付こうと必死に足掻いていく事だろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2827k/

血染めの異能者

2011年9月9日13時30分発行